家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

11

第七十二巻　第十一号　日本幼稚園協会

心ゆたかな 音楽リズムを……

音楽カリキュラムのための
新しい幼児の歌
〈全3巻〉
B5判　〒110円
108頁～144頁　各550円

幼児のための
音楽カリキュラム
〈全4巻〉
（春・夏・秋・冬）増子とし著
B5判　〒110円
解説書とも各400円

幼児のための
生活あそび
増子とし編
B5判　142頁　400円　〒140円

幼児のための
7つのオペレッタ
藤田妙子著
B5判　138頁　400円　〒110円

幼児のための
5つのオペレッタ
藤田妙子著
B5判　116頁　400円　〒110円

幼児のための
3つのオペレッタ
藤田妙子著
B5判　100頁　400円　〒110円

幼児のための
リズミカルプレー
（曲集）
増子とし編
B5判　140頁　400円　〒140円

幼児のための
リズミカルプレー
（解説）
増子とし編
B5判　174頁　350円　〒110円

幼児の動きのリズム
自由表現ABC
藤田妙子著
B5判　116頁　550円　〒110円

幼児の動きのリズム
続自由表現ABC
藤田妙子著
B5判　142頁　550円　〒110円

音楽リズム指導の一年
井上萬里子著
B5判　96頁　600円　〒110円

音楽リズムの計画と実践
安藤寿美江編者
B5判　180頁　700円　〒140円

幼児のあそび(1)(2)
高橋良和・本多鉄麿著
B5判　各84頁
各350円　〒110円

教材とピアノ・レッスンのための
増補新しいマーチ
保田正編著
A4判　94頁　550円　〒110円

幼稚園教育要領に準拠した幼児のための楽しい曲集
みんなでたのしく
日本幼児教育研究会編
B5判　82頁　250円　〒110円

幼稚園教育要領に準拠したレコードによる音楽リズム指導の実際
みんなでたのしく
日本幼児教育研究会編
B5判　138頁　250円　〒110円

ちょうちょもいっしょに
キンダーブック・子どもの歌曲集
B5判　128頁　400円　〒110円

おかあさんと子どものための歌曲集
ごはんをもぐもぐ
まど・みちお作詞
磯部俶作曲
B5判　92頁　550円　〒110円

まど・みちお子どもの歌100曲集
ぞうさん
まど・みちお著
B5判　208頁　700円　〒140円

あひるのぎょうれつ
たのしい幼児のうた
小林純一
B5判　98頁　500円　〒110円

わらいかわせみにはなすなよ
サトウハチロー・中田喜直
子どもの歌曲集
B5判　106頁　450円　〒110円

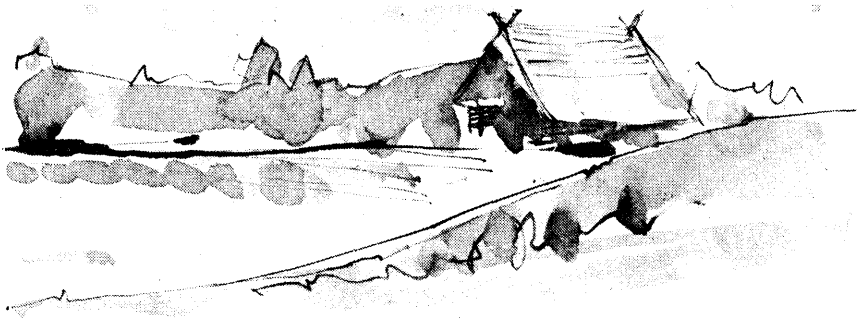
ぼくは海賊
藤田圭雄・子どもの詩集
A5変形判　112頁
600円　〒110円

改訂
幼稚園の音楽教育とその教材
幼稚園教育指導書一般編準拠
玉越三朗他著
第1分冊・音楽教育編　80頁
第2分冊・教材編　140頁
B5判　2冊セット
780円　〒140円

フレーベル館

幼児の教育

第七十二巻　　第十一号



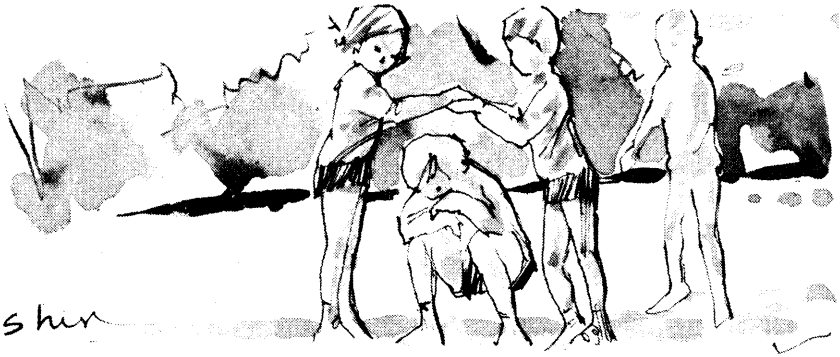
幼児の教育　目次

——第七十二巻　十一月号——

まだまだわかっていない
——乳幼児理解の盲点——……堀　要…（4）
私の保育者雑感……西本　脩…（8）
合宿保育……渡辺靖子…（15）
幼保一元化をこえて（一）……守屋光雄…（18）

表紙　赤坂三好
カット　斎藤信也

© 日本幼稚園協会
1973



子どもの生きがい……菊池百合…(23)
ピーボディー・ナーサリースクールにて……土屋美代子…(29)
米国で保育をうけた私の子ども……藤田美南子…(34)
ぜいたくな空……はそべただし…(38)
子どもの興味と母親の態度……西本美節…(40)
幼児教育の源流（Ⅸ）
オベルリン……利島知可子…(48)
幼児が絵を描いている時（一）
ある四歳女児のなぐり描き……青木隆…(57)
読書のすすめ……横張和子…(68)
行事によせて
――人間の生活と祭り――……本田和子…(70)

まだまだわかっていない

―乳幼児理解の盲点―

堀　要

(一)

大人中心に子どもを解釈していた昔にくらべると、児童心理学の発達によってずいぶん子どもをよく理解できるようになった。児童精神医学の臨床にたずさわるようになって三十五年以上にもなる私は、一時は子どものことなら何でもわかっているようにうぬぼれた時期もあったが、そのうぬぼれはこのごろすっかり変質した。つまり子どものことはいかにわかっていないか、ということを私ほどわかっている者はいないだろうというように。

十年ほど前に私はツリガーの書物をよんで、彼が四十年にわたる正常児および異常児とのつきあいで、いかに大人が子どものことをわかっていなかったか気がついたという意味の文章を読んだとき、私のうぬぼれはほとんど絶望におちいるほどのショックをうけたのである。子どもは、大人が考えているそれとちがった所で、大人が考えるのとちがった仕方で考えるので、時に大人はひどく子どもを誤解してしまう、というのである。ツリガーは子どもの世界観と大人の世界観の相異を対比して示してくれたので、私は絶望からまぬがれた。私は子どもの異常行動をなおすことができないときは、まだその子どもをよく理解していないからであると反省することができるようになった。

(二)

私のところへは幼稚園や保育所でことわられた困り者の子どもをつれて母親がよく相談にくる。そういう子どもたちの半数以上は、もうほんの少しだけこの子を理解してくれれば、園長さんや所長さんはことわれなくなるだろうにと思われる子どもたちである。ある時そういう子どもの一人がキリスト教の幼稚

園でことわられたときいたとき、私はさまよえる一匹の小羊をもとめた羊飼いのことが思いだされてならなかった。

ある時、若い夫婦が一人の幼児をともなって相談にみえた。はじめての一人っきりのこの男の子は、なかなか思うように育たず手こずるので、この夫婦は子どもの心理を知らないからだろうと反省して、二人で児童心理学の書物を勉強した。しかしますます手こずるようになったので、たまりかねて相談に来たのであった。二人は児童心理学はよく理解して覚えたのだけれど、かんじんの目の前にいる自分の子どもを、一そう理解しなくなっていたのである。私は二人にもうこれ以上児童心理学の勉強をすることをやめて、この子が出している心からの信号をよくうけとって理解するように努力することをすすめたのであった。

(三)

先日私はある駅のプラットフォームで、少しおくれている特急列車を待っていた。そばで、退屈しはじめた乳児を、若い夫婦が交替であやしだした。私もついつりこまれて表情であやすと、この乳児はすぐににっこりして反応した。別の機会に列車の中で、私が母の膝の上の乳児の視界にはいったので、私は表情であやしはじめたが、すぐには私への関心をおこさない。くり返しているうちに関心をもち出したので、私は唇の間で舌をうごかして、ベロベロをしてみせた。この子は真剣な表情で私の口を注目しだし、やがてわずかに、そのかわいい口からのぞいている舌をうごかそうとしはじめた。ところがまだベロベロの経験がないらしく、なかなか舌がうごかない。そしてこの母親は、さきのプラットフォームの夫婦とちがって、私の見ているかぎりでは、ほとんどこの乳児をあやすという行動はみせなかった。

私は町でもバスの中でも列車の中でも、そばに乳児がいると、よく相手をしようとするのでそういう経験から、このごろの若い母親に、子どもをあやすことを怠りがちな方がふえたのではないか、と思われてならない。さきのプラットフォームで会った乳児と、列車の中で相手した乳児とでは、ずいぶん育て方に差ができるのではなかろうか。

ベロベロについてずいぶん昔のことを思い出した。私の研究室の後輩の奥様が、乳児をつれて私の家に遊びに来た。私の家内がこの奥様と雑談している間に、私はこの子を手なづけて遊び相手となった。やがて私はベロベロをはじめた。この子は大へんな興味を示して一生懸命真似しようとするが、なかなかできない。ようやく舌をつき出せるようになって満足げであった。これをこの奥様がみつけて私にきいた。「うちはこんなことや

らせたことがなかったが、やらせなければならないもんでしょうか」と真剣な表情で質問されたので、私は、戸まどいして、「行儀のわるいことをおぼえさせてすみません」とあやまった。それでも少しばかり弁解がましい解説をそえて質問への答えにした。舌のあそびは後の言語運動に少しは役に立つかもしれません、と。ともかくもベロベロ遊びを修得しないで、舌出しだけを修得したものだからこまった。ただ、ちょっぴり感じたことは、この若奥様は、子どものしつけには熱心なかまえをもっているが、子どもの相手になって遊ぶ、というかまえもほしいな、ということだった。

乳児をあやす母親は、その子が幼児になると、相手になって遊ぶ母親になるのではないだろうか。幼児にとって、一人遊びから親を相手の連れ遊びを体験する。やがて連れ遊びの相手としては親では不満になってくる。そういう不満をとなえた子どもたちが近づくと、一ぺんで連れ遊びがはじまるだろう。幼稚園や保育所で、なかなか仲間にはいらない子どもは、家庭では、親は「遊ばせる」、または「遊んでやる」ことはしても「相手になって一緒に遊ぶ」ことをしない、ということが多いように思う。ことに一人っ子の場合など。こういう時、うまく親が理解できて家庭で連れ遊びの相手になれるようになると、幼稚園や保育所で仲間に入れるまでに一年もかかるところが、半年ぐらいでそうなれるようだ。これは正確にデータはとれてはいない。データがとれていないといえば、きまめに乳児をあやす親と、ほとんどあやすことを怠る親とで、その育つ子にどのようなちがいがおこるか、そういうデータも私はとっていない。どこかにそういう文献があるのだろうか。

(四)

乳幼児の発達の事実はずいぶん詳細に研究されて、研究報告もつみかさねられている。しかし発達を刺激する環境条件については、まだまだ研究が行きとどいていないように思う。

私どものところで、何年か前に富田順博士が十数名の母親の協力を得て、零歳から三歳児になるまでの母子関係をふくめた乳幼児の追随研究を五年あまりかかってなしとげた。大へん貴重な結果が得られたのであるが、私はこの論文や資料を拝見して、「子を育てている母親は子に育てられている」ことを事実として認めざるを得なかった。子を育てるというとき、育てられる子と育てる者との「からみあい」が人格形成に本質的な役割を果たしているように思われる。

教育といい保育という場合にも、教育や保育の実践に際して、教育者や保育者は、「育てよう」とするかまえをはずしてはならない。そしてそのことは子どもが「育つ力」をもっていること

とを前提として成立する。ところが、集団教育や集団保育においては、育てる手段として「教える方法」をとりがちのため、教育者や保育者の「かまえ」までが「教えるかまえ」になってしまいそうである。教育論や保育論をしている専門家さえ、しばしば「教える」という言葉をよく使い、教えることが教育だと考えているのではないかと思われるような論を展開する。そしてこのことが親たちにまで影響して、いわゆる教育ママにもみられるように「教えるかまえ」でこりかたまってしまって、子に育てられる素直な人間性が失なわれがちである。そして心を忘れて「あたまのはたらき」だけで子どもに対応する。親から子へ一方的に働らきかける方法だけをもとめる。教えようとししつけようとして、どうしたらよいかを自分でも考え、育児書をよみ、専門家の意見をきく。そして、「ままにならない」という壁にぶっつかる。子どもから困る材料だけを抽出して、子ども自体を理解しようとする勉強を放棄してしまう。子どもが勝手に育つ状態に放置されるより、もっと悪い事態がおこることもある。乳児をあやし幼児の相手をすることを怠る親の傾向も、こんなところから生じているのではなかろうか。

このようにして、教育者からも保育者からも親からもさえ、子ども自らどういう体験をしているのか、ということが全く理解の外にのこされてしまうことになる。

(五)

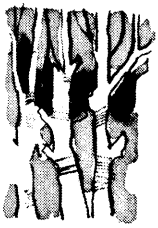
子どもは自らにいろいろの体験をつみかさねることによって人間として形成されていく。「ひととなっていく」のである。つまりその体験の一つ一つが血となり肉となっていく。少し科学的にいうならば、ニューロンが機能することにより脳全体が機能化していく。

ところで、乳幼児期に是非体験しておかなければ、そのことが原因になって、その人の生涯にわたって、その人のひととなりの中に大きな欠落となる、そのような体験があるであろうことは、ほぼ確実に推定されるようになった。たとえば乳幼児期に「かわいがられる喜び」という愛育体験が欠乏――精神飢餓ともいわれる――すると、その子はそのためどのような愛情豊かな環境で育てられても、もはや生涯にわたってすくいがたい欠陥として、人を愛する能力、人を信じる能力に欠乏したままにとどまるといわれている。そのような必須体験が、ほかにもまだあるはずだが、どなたかご存知だろうか。私はまだ知らない。そのため安易に集団保育を最上と考える親心がおそろしいのである。

(名古屋大学)

私の保育者雑感

西本　脩



一、

私が幼児保育や幼児心理の問題に興味をもち、その道に足を踏み入れてからやがて三十年近くになろうとしています。この研究を自分のライフワークとして選ぶようになったのには、深い神の摂理がひしひしと感じられます。

私はキリスト教徒の家庭に生まれ、まだ物心がつかない時分に、「将来、神と人に仕える人間になってほしい」という両親の願いから、敬けんな祈りをこめた幼児洗礼を受けました。それ以来、神のご恩ちょうと両親の暖かい愛情のもとで育ち、日曜日には家の近くにある教会の日曜学校へ通い、しらずしらずの間にキリスト教の感化を受けるようになりました。母がいつも口癖のように私に言っていたことは〝大きくなったら人さまのお役にたつ人になってほしい。〟ということでした。今なお親の期待にそうことができないので恥ずかしい思いをしていますが、幼児保育の道を志す直接の動機になったのは、この母親のことばのほか、二人の先哲のことばでした。どちらも旧制高校・大学在学中に読んで感銘を受けたものです。

その一つは、「新約聖書」の中の「マタイによる福音書」第一八章の一節から一四節に載っている次のようなキリストのことばです。

そのとき、弟子たちがイエスのもとに来て言った。「いったい、天国ではだれがいちばん偉いのですか」すると、イエスは幼な子を呼び寄せ、彼らのまん中に立たせて言われた。「よく聞きなさい。心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう。この幼な子のように自分を低くする者が、天国でいちばん偉いのである。また、だれでも、このようなひとりの幼な子を、わたしの名のゆえに受けいれる者は、わたしを受けいれるのである。しかし、わたしを信ずるこれらの小さい者のひとりをつまずかせる者は、大きなひきうすを首にかけられて海の深みに沈められる方が、その人の益になる。……あなたがたは、これらの小さい者のひとりをも軽んじないように、気をつけなさい。……あなたがたはどう思うか。ある人に百匹の羊があり、その中の一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に残しておいて、その迷い出ている羊を捜しに出かけないであろうか。もしそれを見つけたなら、よく聞きなさい。迷わないでいる九十九匹のためよりも、むしろその一匹のために喜ぶであろう。そのように、これらの小さい者のひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではない。

私はこのイエスのことばにひどく魅せられて、将来は幼な子のしあわせのために働こうと思うようになりました。もう一つのことばは、ルソーが「エミール」の中でいっていることです。

われわれが生まれると同時に、われわれの教育は始められる。われわれの教育はわれわれと同時に始まる。われわれの最初の教師は、われわれに乳を与えてくれる生母または乳母である。

と。また、このことばの注で、次のような味わい深いことも述べています。

子どもの初期の教育は最もたいせつである。そして、これが女のすべきものだということは疑われない。もし自然を造った神がこれを男にさせようと考えたのなら、神は幼児を哺育するための乳を、男に与えたはずである。ゆえに、教育論はわけても女に向かって語るがよい。なぜなら、女は男よりも子どもの近くにいて、これを監督し、子どもにより多くの感化を与えるのみでなく、その教育が成功すれば、女は非常な利益を受けるためである。……母親の子どもに対する地位は父親の地位よりも一

層たしかで、その義務は一層骨が折れ、その心がけは家庭の幸福を左右することが一層大きい。またおおむね母親の方が子どもに対して、より多くの愛着をもっている。と。これらのルソーのことばから、私は母親の責任の重大さと母親教育の重要性について考えさせられました。

その後、自分が実際に父親になってみて、ルソーのいうとおり、父親（男性）が母親（女性）の力に比べるといかに無力なものであるかを体験しました。そして、幼児の保育にたずさわる保育者は、男性よりも女性に向いた仕事であると思うようになりました。

二、

幼児の保育を効果的にするためには、いろいろな条件を整える必要がありますが、とりわけ重要な条件は、すぐれた保育者を得ることでしょう。たとえどんなにその施設や設備が整っていても、保育案や指導計画がりっぱにできていたとしても、実際にその施設・設備を利用し、指導計画を実践するのはひとりひとりの保育者ですから、保育者がよくなければ、ほんとうに保育の効果をあげることはできないでしょう。そればかりではなく、場合によっては、幼児の成長発達によくない影響を与えてしまうかもしれません。またこれとは反対に、たとえその施設や設備がそれほど完全ではなくても、保育者が有能な人物であれば、これらの欠点をカバーしてなお余りあるよい保育をすることができるでしょう。

結局、施設や設備を活用するか宝の持ち腐れにするかは、保育者その人しだいであるといえましょう。つまり、すぐれた保育をするためには、なによりもまず保育者がすぐれた人でなければなりません。施設や設備・教材や教具などは第二義的な条件といってよいでしょう。

三、

人のからだを診療する女医は、学歴も社会的地位も高く、収入も多いのに、幼児の心を診療し、魂を育てる保育者は、学歴も社会的地位も低く、収入が少なくてよいものでしょうか。仕事の重要性からみれば、人間の心をはぐくむ保育者の役割は、女医と同じ程度か、あるいはそれ以上に重要だと思います。医者のミスは直接患者の死を招く可能性が多いので、その職責は非常にきびしく考えられていますが、保育者の責任については、一般に考え方が甘すぎるのでは

ないでしょうか。なるほど、保育者のミスは直接幼児の命取りにはならないにしても、受け持つ子どもの心を傷つけ、精神的に殺してしまったり、人格をゆがめてしまう危険性があります。ですから、保育者の職責も、女医と同様に重大であるといわなければなりません。したがって、その仕事は、だれにでもできるようなまやさしいものではなく、高い教養と広い専門的な学識と技能を必要とし、専門的な訓練を受ける必要があるものです。

四、

保育者の社会的地位を高め、専門職としての実力をつけるためには、保育者の養成法をさらに充実させる必要がありましょう。実際に保育者養成にあたってみると、修業年限二年（短期大学）では、まったく中途半ぱで、いろんな知識や技能を少しずつかじってみるだけで終わってしまいます。また、他の専門的な職種について資格を得るのに要する教育年数をみると、短大程度のものは少ないようです。専門性が高い職種ほど教育年数は長くなっており、教育年数が長ければ長いほど（学歴が高ければ高いほど）待遇もよりよく、初任給から高くなっています。

他の職種にひけを取らない社会的地位や給与を得るためにも、保育者はすべて四年制大学において専門教育を受けることにし、その卒業者（学士の称号をもつ者）を基礎資格とする必要があるでしょう。将来は修業年限二年の幼稚園教諭養成課程を廃止して、保育所保母の養成も幼稚園教諭の場合と同じく、四年制大学の養成課程で行なうようにし、現在各都道府県で実施されている保母試験制度はなるべく早く取りやめるべきだと思います。保母試験は高校卒業程度で受験でき、短大相当の教育さえも必要としない即席養成法です。このような教育程度の低い安直な方法を続けているかぎり、保母の社会的地位や待遇は、いつまでたっても向上しないでしょう。

なお、この保育者養成の問題は、保育者が若い女性にとって魅力的な職業となる条件を作り出すことと切り離して考えることができません。したがって、当然保育者の待遇の改善や、身分保障の確立が実施されなければなりません。

五、

近年、保育者の平均勤続年数が長くなってきましたから、外見上はこの仕事が一時の腰掛けの勤めではなくなったよ

うに見えますが、これはどうも表向きだけのようです。保育者の内面、つまり職業意職では、まだ腰掛け的な気持ちの者が多いのではないでしょうか。平均勤務年数が長くなったのは、一般に女性の婚期が延びたのと、共働きが多くなったためで、職業意識が高くなったためではないようです。このような腰掛け的な心持ちが、職務に対するおう盛な研究心や積極的な意欲の発展を妨げているのではないかと思われます。だからといって、日常の仕事まで熱心にやらないというのではありません。ふだんの与えられた仕事はちゃんとやり、退職の前日までまじめに働く人が多いようです。

女性に対する、もっとしっかりした職業意識をもってほしいとか、責任感をもって仕事に当たるようにとかいった要望は、なにも保育者の仕事に限らず、他の職場の管理者からもよく聞きます。これらの要請は、ただ単に女性ばかりでなく男性に対しても重要な要件でしょう。けれども一般に、女性は男性に比べて職業生活が二次的で短く、ライフワークでなく一時的なものである場合が多いようです。これは、家事とくに出産・育児など女性特有の仕事があるのでやむをえませんが、たとえ保育者としての職務がライフワークでなくかりそめのものであったにせよ、これは自己をみがき、ひいては妻となり母親となった後も、家庭生活を豊かにするもとにもなると考えて、保育者の仕事に誇りをもち、打ち込んでほしいと思います。

また残念ながら、女性には男性ほど職業に対するきびしさがみられないことが多いようです。もちろんいい加減な男もいますが、多くの男性は、未婚・既婚を問わず仕事を第一義的に考え、仕事を通じて自己の生計をたてたり妻子を養ったりするために、知識・技能を身につけ、生産性を高めるといった真剣なきびしさをもっています。未婚の女性の多くは、いずれ結婚すれば生活には困らないから、それまでの間、一時的にする仕事と考え、既婚者は家庭を第一に考え職場を二の次にするので、いずれも仕事一すじに生きるというような気迫は少ないようです。

保育者の勤続年数が、学校の女教師の平均勤続年数と比べて短いことは、保育界の進歩発展を遅らせる原因となっています。尊い幼児保育の仕事をがんばってやろうという意欲に満ちて幼稚園や保育所に就職し、無我夢中で仕事をする時期を過ぎて、ようやく職場にも慣れこれからいよいよひとり立ちし本領を発揮しようというころに、多くの保

育者は「結婚するのでやめたい」とあっさり退職してしまいます。そして、未経験の保育者が振り出しにもどって跡を継ぎます。この保育者もやっと慣れたころに、また別の新人と交替します。……保育者の勤務はこんなことの繰り返しであるため、幼児保育界では研究の積み重ねが困難で、進歩が妨げられている面が多いようです。

六、

創意に乏しいということは、なにも保育者に限らず他の職種についてもいえることですが、アイディアの提案では、女性は一般に男性に比べて少ないそうです。また、研究会や協議会の席上でも、一般に女性の発言は少ないようです。けれども、これだけで女性は創造性がないと結論するのは早計でしょう。個人的な話し合いや同僚仲間の雑談では、なかなかいい意見を述べていることからしても、創意工夫の能力がないとはいえません。それでは、なぜみんなの前で堂々と提案したり意見を述べたりしないのでしょうか。おそらく他人から「差し出がましい」と思われはしないだろうかとか「意見がもしまちがっていたら恥ずかしい」とかいうような気持ちが先だってしまうからでしょう。

創意に乏しいもう一つの理由は、女性は体力や精神的緊張に対する抵抗力が弱いため、高度の企画や判断力を要するような仕事に耐える力が乏しいためでしょう。責任の重い仕事や複雑で困難な仕事は、精神的緊張から飽きや疲れを感じやすいからです。この特質は、女性にとって根本的な弱点となっています。けれども、創造力がないわけではありませんから、教育的機知を働かして、日々に新たな創造的保育をするよう心がけてほしいと思います。

できあいの保育案・指導計画や教材を、ただ機械的にまねるような保育では困ります。受け持っている園児の状態は、保育雑誌等に載っている平均的な幼児の姿とは違います。自分の園や地域の実態にぴったりした保育案、園児の実情に合った指導計画でなければなりませんが、それは保育関係の本や雑誌にはどこにも載っていません。自分で工夫して作成しなければならないものです。

七、

女性は男性よりもしんぼう強く、単調な仕事でも飽きずにやり遂げます。また、男性と違い綿密に物事をします。細かい点にまで注意が行き届き、まめに子どもの世話をす

るので、ずさんな男性よりも幼児の保育には向いているといえましょう。そのかわり、女性は一般に、ささいなことに気がつきすぎて大所高所から物事を判断することでは、男性に及ばないようです。

保育者はただ近視眼的に目先の仕事に没頭するだけではいけません。狭い幼児保育の世界だけに閉じこもっていないで、教育問題はもちろん、政治・経済・社会・文化などの諸問題についても関心をもち、広い視野から考える必要があります。保育効果の評価についても、目に見える成果だけを追うようなことなく、幼児の活動の過程や動機をも充分に注意してみて、あせらず着実に日々の充実した保育を積み重ねていかなければなりません。

八

女性は一般に感情的でしっと深く、利己的で自分の受け持つクラスのことしか考えない傾向もあるので、ややともすると同僚間のチームワークが乱れがちとなります。一つの園の中で保育者どうしが互いに協力し合うよい人間関係をつくることがたいせつで、個人的な目先の利益よりも、まず園全体のことを優先的に考える必要があります。同じ園の中にいる保育者どうしが互いに抜け駆けの功名をねらったり、過当競争をしたりしないようにしなければなりません。

九

現状では、保育者がほとんど女性であるため、幼児の運動量が少なくなり、冒険的な経験や活動が危険視され抑制されがちで、特に男児はいくじがない、おとなしい弱々しい女性的な人間になる心配があります。男児の女性化を防ぐためにも、保育者は事なかれ主義の消極的な保育をしないで、もっと子どもといっしょにすもうを取ったり、サッカーをしたり、ジャングルジムに登ったり台の上から飛び降りたりして、幼児の活動を活発にしてほしいと思います。

（大阪樟蔭女子大学）

合宿保育

渡辺靖子

一学期も終了という翌日は、毎年、年長組の合宿保育が計画されている。卒業生が「一番楽しかった」と話すので、「是非してほしい」といわれるが、先生方の心身共に疲れ果てるようすに何度かためらいもあったものだ。「子どもたちがそんなに喜んでくれるのなら……」という先生方の気持ちのいい申し出と「私たちでできることなら何でもしますから……」というお母様方の応援を得て、今年もまた続けられ、前年の記録と反省をたよりに、よりよい方向づけをしながら、七月二十日を迎える運びとなった。

午前中の涼しい時にお母様方が大掃除に来て下さる。保育室の机、いす、その他の備品はすべ幅三メートルのベランダへ出され、清掃後の保育室は幼児の手の届く所はすべて消毒し、虫よけにバルサンがたかれる。やがて部屋に貸ぶとんが届く。これまた気持ちのいいほどま新しく衛生処理されているのだが、これで五十㎜余の大寝室が設定完了となる訳だ。また階下年中組の保育室は食堂と早変わりし、お母様方が引上げられるころは、先生方に、仮眠をとり夜に供えてほしいのだが、あらかじめ提出された園児の家庭調書の一覧表を繰返し眺めながら、一人一人を想定し思いにふけることが多い。楽しい思い出のために家庭的なふんい気で迎えたらとか、友だちと心のつながりができるのでは？　また親を離れて泊ることから成長の喜びと共に自信ができるのでは……と、思いは尽きない。

やがて期待と焦燥と不安の交錯する中で、努めてにこやかに園児を迎える訳だが、折しも夕立の後とて涼風の立つ午後六時を前後して、三々五々母親と登園して来た。湯上がりのこざっぱりした顔に夕日がはえて「せんせい、おはようございます」「あっ、こんにちわ」「こんばんわ」、

いろんなあいさつが笑いの渦の中に消える。一週間前からの導入で保育室が寝室になることへの関心も深く「こちらが玄関なの。さあ！　どうぞ」という担任の声に喚声が上がり、ベランダ入口に並べたママゴト用の座敷際で上ばきを脱いで入室。お弁当（夕食用）と歯みがきの入ったかばんはベランダ側のかばん掛けに、パジャマ入れの絵本袋はロッカーに入れて、壁面にはられた日程表をうれしそうに見ては友だちと話している。シーツとタオルケットをかごに納め「〇〇ちゃん。じゃがんばってネ」と帰って行く母親の声はもうその耳に届かない。何もない保育室の解放感に、走り廻るのでは？　との予期に反して車座になり、おしゃべりは続く。積み上げられたふとんがそうさせるのか。やがて全員そろうころは日没も近く、手に手に通園かばんを持ち階下の食堂で夕食となった。夜半に空腹で眼覚めてはかわいそうなので、家庭と同じ時間に夕食を、と試みたことだったが、大好きなお弁当からスタートする合宿は快調のようである。食事中話題の人気をさらった花火大会は七時すぎから始められた。

まず、食事終了のクラスからバケツを囲んでめいめい花火を楽しんでいたのだが、折あしく雨が降り出したため、急きょ予定を変更し、担任と二階のベランダから花火見物となった。家庭ではできない中国製のさまざまな花火が飛来する度に喚声が上がり、拍手がわく。この日ばかりはお兄さん先生（主事）の大活躍、おじちゃんと二人の名演出は物の見事に園児を魅了してしまった。プールの水面にはえる花火もまた一興だったが、気が付くと団地の窓々に顔、顔。顔。園庭のさくの暗やみにも重なる人影。いつの間にかこの花火も団地の名物になったようだ。充分楽しんだ後は、階上のゆうぎ室に雨上りの涼風をいっぱいに入れ、映画を見る。

ベランダは消燈せずホールの中だけ消燈していたのだが、突然泣き出した子を担任が連れて来た。話を聞くとどうしても帰るというので家庭に連絡をとると「無理だったんです。昨日まで熱があって寝てたので止めたんですけど」とお母さん。そこで明朝の散歩に途中から参加して朝食を一緒にすることに話し、送り出した。予測はしていても驚かされる。そうこうする中に保育室は年中・少の先生方で床が敷かれ、寝室は就寝を待つばかりとなり、担任と歯みがき、トイレを済ませて来た子どもたちを迎える。枕元へ持って来た絵本袋からパジャマを出し、担任の説明でいっせいに着替えるのだがそのにぎやかなこと、仲よしの友だちと寝る楽しさははかりしれないもののようだ。着衣が絵本

袋に入れられ片付くころが九時、消燈だが、各組から就寝終了の知らせが職員室に届くころには放送準備もOK。静かに闇をぬって童話の朗読が流れ、やがて「おやすみなさい」、後はボリュームを落としてレコードが早くお眠りとささやくように一しきり続く。今年は夜半雨になり涼しさも手伝ってか、比較的心地よく眠りに入ったようだ。

団地の窓明りがほとんど消えるころ「先生、お願いします」と担任が泣きじゃくる女児を抱いて来る。泣き方から寝ぼけたようすなので受け取りながら眼覚めを待って「幼稚園にお泊りしたのね。ずいぶんお姉ちゃまになったわね。わかる？　W先生、A先生も一しょよ」と、その中にフト大きな眼を開けたかと思うとすーっと寝息を立てて、そのようすの何とかわいいこと。二人で顔を見合わせ、笑いをこらえて保育室へ抱いて行った。五クラスもあると各組に一人は手のかかる子はいるようだが、落着いて処置している先生方のようすは実にたのもしい。今年は職員控室に引き取った子は発熱と鼻血の二名だったが、どちらも家庭でなれていることなので泣きもせず、冷やしてもらい、翌朝迎えが見えるまで熟睡していた。

朝の眼覚めは各組各様でまたおもしろい。一応六時起床とはなっているが、その差は約四十分ほどで、着替え、洗面の済んだ組から散歩に出かける。すがすがしい朝の空気を胸いっぱい吸い込んで、明けやらぬ団地の窓々を見上げ、早起きの優越感に浸るのもまた格別といったおももちで帰って来る。園庭でハトポッポ体操を、またちょっと気取ってラジオ体操をしたり、七時の朝食に間に合うように入室する。朝食は自宅も近いことなのでごく軽く牛乳、クラッカー、チーズ、プディングとしたところ、大変受けていたようだ。

食後は、寝室変じての保育室で、担任を囲んで楽しいおしゃべり。その中でほめられて満足そうな顔が並ぶ。中でも母親が特に心配していたK君の、ひときわ生き生きとうれしそうな顔が印象的だった。やっぱり行事に取り上げてよかったのだとみんなの顔が教えてくれている。八時に母親に迎えられ降園して行く後姿に、無事故の喜びと共に、教師ならではの満足感がそれぞれの胸に迫るのだった。

終わってみて今年の感激は、何といっても卒業して行ったPTA前会長が、役員を伴い、先生方のお夜食に、と手作りのお料理を、それも雨の中を届けて下さったことだ。ご主人運転の車を夜半の玄関で見送りながら、過ぎこし方のPTAを思い出しながら、「誠意」「誠意が」とつぶやいていた。

（上尾ひなぎく幼稚園）

幼保一元化をこえて(二)

守屋光雄

前回述べたような保育理念のもとに運営されている北須磨保育センターにおける保育方針や保育内容には、いくつか特徴的なものがある。今回は、その中での主要なものについて述べる。

(1) 家庭保育と集団保育の特徴をよく理解し、特に、集団主義保育を重視する

子どもを、歴史的・社会的存在としてとらえるならば、子どもは、家庭、集団（施設・学校）、社会のいずれかのみの教育によって、発達するものでなく、またこれらの教育的区分も、けっして年齢層のみによる区分ではない。これらは人間形成に対して相互補完的ないし代替的役割をもつものである。したがって、家庭保育か、集団保育かというように二者択一的に是非を決すべきでない。いずれの教育も子どもに必要であり、しかも、それぞれ教育目標や内容の重点が異なる。いずれにも共通なものがあり、相補うものもあるが、家庭保育でしかできないもの、家庭保育ではできないもの、集団保育でしかできないもの、集団保育ではできないものがある。たとえば、家庭は、主として肉親たちが楽しく生きることを教育するところで、他人と協力することは、集団のなかで教育される。このような家庭保育と集団保育の特徴と関係をよく理解することが大切である。

このような理解のもとに、保育センターでの集団保育は、集団主義保育の立場で行なわれている。わが国における集団主義教育は主として、「一人は万人のために、万人は一人のために」をスローガンとするマカレンコの集団主義理論を背景としてい

るが、集団主義保育では、幼児期から集団の中で、同士的精神、友情、強い体力と意志、学習や労働に関心をもった集団主義者を育てようとするものである。

集団主義保育では、役割意識を確立するため、グループづくり、当番制を重んずる。たとえば、給食当番は、白帽、白衣を着て、役割意識を、当番も、当番でないものも、互いに確固たるものにする。

集団討議を活発に行なう。集団意識によって、グループ作りをし、また保育内容を自主選択させる場合も話し合いによる。

身辺の問題はもちろん、祝祭日の意義、戦争（ベトナム）、労働（メーデー、ストライキ）などの時事または社会問題、などについても集団討議する。

協同の活動には統一的組織が必要であり、そのため集団組織における規律が重視される。集団で約束したことや社会的ルールにそむいた行為は、集団の中できびしく、相互批判、自己批判が行なわれる。私たちは、これを〝人民裁判〟と呼び、反省されない場合は、違反事項をかいた札を首にかけて、各クラスを回らせたり、一定の場所に立たせることもある。

自由（自主）遊び後の、遊具の片づけなども、全く、子どもたちの自主、協力によって行なわれる。

(2) 身心を積極的に鍛錬し、すぐれた体力と強固な意志を養う

夏はプール遊び、四季を通じての戸外での乾布または冷水まさつ、薄着の励行（寒中も半ズボンまたはスカートと短ソックスを用い、長ズボン、タイツ、外とう、手袋等の着用禁止）冬期は毎朝マラソンを敢行。

水あそび　泥んこあそびを積極的にやらせる。

すべり台のさか上がりもさせるし、竹馬や自転車も与えている。

「散歩」と称する園外保育を、ひんぱんに行ない、山野を跋渉、ロッククライミング、崖スベリ、一本橋渡りなど、どしどしやらせる。散歩の際の集団行動も、もっぱら子どもたちの自主、協力によって行なわれ、危険箇所があればリーダーが伝達し、難渋する子どもがあれば、皆で、はげましたり、援助したりする。

(3) 「机の保育から野外の保育へ」

教育とは、机といすと黒板と教師によって規制されるという従来の教育観を打破し、自由な形態で行なわれるべきであり、

とくに、「自然に帰る」ことを重視、前述の、戸外での自由（自主）遊び、心身鍛練のための活動、「散歩」などを積極的に行なう。なお、「散歩」は体力づくりに力を入れるだけでなく、自然観察、小動物の採集などのほか、随時、工場、市場、工事現場などを見学し、労働や生産の意義を理解させることも目的とされている。

(4) 教材園の活用

園から約五〇〇メートルはなれた所に、広大な付属教材園をもち、母親たちの協力を得て、花壇、菜園、果樹園をつくり、子どもたちもうえつけ、水やりなどの手伝い、成長の観察、収獲、採取も行なう、野菜や果物などは、給食の副食やデザートに使われたりする。きらいだった野菜や果物も、自分たちが栽培し、収獲したものは、好んで食べられるようになったケースも少なくない。

(5) 廃品活用の造形活動

子どもの創造性を伸ばすための絵画制作。粗材性にとむ材料として、土粘土の他、種々の廃品を豊富に用意する。家庭からも持ってきてもらうが、燃えない廃品を各家庭から出す日がわかると、職員は前夜園に泊り、朝回収されぬうちに、リヤカーを引いて、子どもたちと廃品をあつめてくる。大はミシン、テレビ、アンテナ、家具、冷蔵庫、洗濯機、電気掃除機をはじめ、木片、ダンボール、スチロール、こうもり傘、等々、廃品回収業さながら集めてくる。これらの資材をもとに、共同または個人で、創造的造形活動が活発に展開される。これらの作品は、〝造形展〟として展示される。

(6) カリキュラムの自主編成

中教審路線を批判し、既成の幼稚園教育要領や保育所保育指針に依存せず、前述の保育センターの理念と実践の中から、創造的カリキュラムを職員たちが、自主編成して、行なっている。したがって、従来の六領域のカテゴリーなどにとらわれず、たとえば、「自由（自主・協力）遊び」「体力づくり」「社会事象」「表現」（言語、音楽リズム、造形）といった柱で保育案を立てたり、年齢によって、「基本的習慣」を入れたり試みている。しかも、こうしたカリキュラムは、決して固定したものではなく、今後の実践のつみ重ねの中で、変革されていくものである。

(7) 親におもねり、子どもを犠牲にするような保育や行事は行なわない。

いわゆる「お遊戯会」のような子どもを見世物にするようなショウは行なわない。

七夕祭も、子ども中心にやり、親はよばない。年長児は、プラネタリゥムを見学、天体に関心をもたす。

体育祭も、遊戯はやらず、体育的なゲームや競技を親子共々やる。全園児に、参加章としてバッヂを渡し、個人賞は出さない。

遠足は、親の付添いなし、遊園地にはいかない。いちご狩り、栗拾いなどにいく、

母親参観は行なわない。子どもや教師を犠牲にして、しかも、正常な保育や子どもの姿を見ることができないからである。

入園式、卒業式、体育祭などにも、来ひん席も設けず、子どもに無縁の来ひんも招かず、子ども不在の従来の形式や慣例に拘束されないで、子ども本位に行なう。

父の日も、父親参観でなく、「父と子のつどい」にして、園庭で、父と子がゲームや体育遊びなどをする。

保育センターの理念や実践を理解し、乳幼児の保育に正しい認識をもたせるため、毎月「保育講座」を開き、この講座は、一般公開される。

親の参観日は設けないが、親との懇談会をもったり、毎週相談日を設けたり、家庭訪問を行なったりする。毎月の月案、予定表をプリントして親に渡す。機関紙「しろはと」を毎月発行教師、親、子どもなどのコーナーを設けている。

このように、親や子どもを「お客」扱いしたり、親にこびる保育をやめ、教育の主体性を園がもつことを重視している。

そのため、親の会も、園の財政的後援団体でないことをお互いに確認し、花壇や菜園の奉仕、講演会の際の託児、諸行事の手伝いなど、園とは協力するが、会の運営は自主的に行なわれ、会計などはすべて、会で管理されている。会費の大半は、保育講座などの研究費に使われているが、教師への手当、研究費などは、母の会から援助されることはない。

(8) 保育者の研修権の確保

子どもの発達を保障できる保育を期待するために、保育者の研修を保障することが肝要である。

保育センターでは、子どもの発達、教師の研修を阻害するいわゆる「長時間保育」や、零歳児保育や途中入園を拒否し、午後保育は当番制にし、四時以後の保育は助手によって行なうな

ど、研修時間を生み出す努力をしている。

毎週、月曜日午後一時から行なわれる園内研修会中の午後保育は、助手や代替保育者によって行なわれる。また職員が、園外の研修会、学会にも参加または発表できたり、特に夏期は、一人二十日、一斉休暇二週間はとれるように調整し、研修に必要な費用は、園で支出することにしている。専任職員一斉休暇中は、親たちにも、休園に協力してもらうが、やむを得ないケースに限り、助手または代替保育者が保育にあたることになっている。

(9) 集団指導体制

センターでは、クラス担任はあるが、教師はセンターの職員であり、子どもも、各クラスに属するが、同時に、センターの子どもであるので、教師も子どももクラスのセクトにとらわれず、センター全体の統一組織のメンバーであることを自覚する。

前述のように、教師や子どもは当番制を実施している。午後保育・休暇中の保育、朝の集りの進行、職員研修会の議長と書記、諸行事の係も、交替制で当番する。

主任も、年功制でなく、係と考え、二、三年で交替する。

このようにすべての職員が、平等に仕事を分担し、その役割を意識し、相互に協力している。（つづく）

十一月の子どもの歌から　たき火

私は幼稚園の時から、おゆうぎが好きだった。そしてそのまま大きくなった私は、昭和十六年保育実習科に入学して、またおゆうぎの好きな学生になった。ことに戸倉先生の、およそあのご体格だけでは想像できない、大人の演じる幼児の動きに深く感動したものだった。そして、私が幼稚園の時に好きだった（と母にきかされた）キューピーさん、木の葉、たこあげなどをまた新たな思いで教えていただいた。中にはまたいくつかの新しいゆうぎもあった。その中で、大人になった私が好きになったのがこの〝たき火〟だった。〝垣根の垣根の曲りかど〟〝しもやけお手手がもうかゆい〟と歌い、おどりながら私は、自分のしもやけのきたない手をこすったりした。私たちの学生時代お茶の水の附属幼稚園の廊下は、当り前のことだが、私たち学生が水で雑きんがけをしたものだった。

なぜか、十一月というとこの歌を思い出す。　（赤間　峰子）

子どもの生きがい

菊池　百合

はじめに

「そろそろ子どもの生きがいを書いてもよいころでしょう」と原稿の依頼を受けた。わが子はもう二歳の誕生日を過ぎたから、そういうころなのかなと単純に引き受けてしまった。しかし、いざ書こうとすると、子どもの生きがいを書いてよいころとは、どんな意味でいわれたのか、はたして本当によいころなのだろうかとちゅうちょせざるを得ない。

児童学科卒業後、幼稚園と短大保育科に勤め、子どもたちのことについて考えている間は、将来自分の子どもはこう育てたいと種々の期待をもっていた。しかし現実に自分の子どもを育てること二年余を経て、どうも以前に考えていたことは、遠大な夢のごとき存在にすぎず、いざ自分の育児をもとにして子どもの生きがいについてまとめてみようとすると、望ましくない親の育児の公開のようで、全く面目ないしだいである。

成長記録

子どもに関する書物では、成長記録を克明に記し、それを基礎にして物事を論じていることがしばしばある。最も身近に対象者が存在するのであるから、記録をとって、子どもを知る参考にしたいと、あれこれ方法を思いめぐらしていた。しかし母親というものは、なんとも雑事が多く、その上意志の弱い私は、かなり短期間で継続した記録をとることをあっさりとあきらめてしまい、以後は気のむくまま、心のむくまま記録をとろうと

いうことにせざるを得なかった。

わが子の記録をとりながら感ずるのは、幼稚園やその他の幼児グループで記録をとっていた時のように、個々の子どもを客観的にみることができにくくなっていることである。いわゆる親馬鹿根性が頭をもたげてしまい、視野の狭い、わが子中心の記録、それも親の自己満足のための記録になっているのではないかと思えることである。それにもかかわらず、少しずつ記録はふえている。

子どもの生きがいとは

子どもの生きがいについて考えてみると、子どもの生活の中で、子どもが喜々として遊んでいる時、何かに熱中している時、充実した時をすごしている時、子どもは生きがいを感じているのではないかと思う。

子どもがそのような状態にあるかどうかは、親の判断で勝手に決めてしまいがちであり、はたして本当に子どものそれと一致しているかどうかは問題である。時として、親が自分の期待を生きがいとして子どもにおしつけていることもありうることであろう。

どんな時に遊びに熱中し、遊びが充実しているかは、年齢、性別、個性、環境等によりかなり違うものになろうが、親や周囲の人に受容され、安定した場で遊んでいる場合は、比較的これに属する遊びがよくみられるといってよかろう。

したがって、子どもが生きがいを感じてすごすためには、親や周囲の人々の理解や協力が必要になる。そしてこれは子どもを育てる親の生きがいに結びつくことになろう。

乳児保育

わが子が、十ヵ月から一年四ヵ月の約半年間、週一、二回、お茶の水女子大学で行なわれている乳児保育に、母子で参加した。これは乳児の集団保育施設を研究するためのものであり、その時期には、零歳～三歳の子ども、五～十人が、三～五人の大人と、一日五時間ぐらいを共にすごしていた。親の都合で、子どもの人数や年齢はかなり変動したこともあった。

子どもの数の割に、大人の数が多いため、直接に子どもの世話をせずともよいことがあり、やや客観的にわが子を観察し考える機会になった。乳児保育で喜んで遊んでいたと思われる場面をもとに、成長の姿を追ってみた。月齢が進むにつれて、子どもが興味を示す遊びが変化していくことは、子どもの生きがいを考えるとき、子どもの成長の姿をよく把握しなければならないことを感じさせられた。

おもちゃへの興味・友だちへの興味・場への安定感・大人へ

の信頼感等により遊びは大きく左右された。はじめのうちは、何かしようとすると、母親をさがし、そばにいてもらいたがり、次のおもちゃに移ろうとする時も、母親の姿を求めていた。みつからなかったり、少し離れた所にいたりすると大声で泣いた。都合によって母親がいられない時などは、保育者にぴったり身体をつけてだかれて、三十分近くも泣いたりした。しかし二時間以上も落ち着いて昼寝をしてしまうこともあったりと、活動の状況は他の要因がからみ一定していなかった。

☆　☆　☆　☆

十ヵ月

おもちゃの電話を好んで使う。部屋に入りすぐに電話をさがし、ベルをならしたり、ダイヤルをまわしたりする。しかし他人と話をしたり、きいたりする用途には用いない。これはすわっていても使えるし、他人とかかわりあいなく、ひとりでできるし、動くし、音も出るためかと思われる。

十一ヵ月

電話は相変らず気に入って使う。ベルをならしていると、ねじの部分が動くので、そこをさわったりする。カタカタ自動車（押して歩くと音の出るもの）・プープー人形（ゴム製で押すと音がでるもの）・タンブリン・ままごとのフライパン（自分の絵本と同じ絵がついているもの）を好んで使う。

数歩歩くことができるようになり、歩くことに興味を示す。年上の子がおしゃべりをしつつ遊ぶのに刺激されてか、声を出すことを喜び、声を出して遊ぶことが多くなり、大人と関係をもちたがる。おもちゃも動かすことにより音の出るものを好む。

一年

お手玉・カタカタ自動車・小さなトラック・ボール・棒等数多いものを次々に手にするが、それを用いて遊ぶというよりも、他人のまねをして後からついて歩くために使うのと、そばに他の子どもが近づいてきて警戒する時になげたり、物と物をぶっつけて音を出すために用いる。

自分から小さな行動をおこすことを始める。

一年一ヵ月

マジックで描く。自動車・積木等特に気に入ったおもちゃはなかった。ほかの子が遊ぶのを見て喜んだり、やや大きい子の後をついてこわごわと遊びをまねてみたり、かなり自由に歩けるようになったため、遊びそのものに変化がみられる。

一年二ヵ月

プールを使いはじめたが、中に入ることには抵抗を示し、コップで水をくんでこぼしたり、砂場に水を運んで砂遊びをしたりする。初めはびくびくしつつしていたが、長時間やめようとしなかった。水と砂の感触が楽しかったらしい。

一年三ヵ月

すべり台（二ヵ月前は近よってもこわがり使おうとしなかった）・タンブリン・小さい自動車・積木等を使用した。すべり台は積極的に参加したものであるが、その他はあちこち歩いているうちに偶然に手にふれて使ってみるという感じで、他人がしているのをまねたり、他人が使っているのをほしがったりする。そのためになぐられたり、つねられたりし、自分もなぐり、つねり、大泣きし、フラストレーションが強い。

すべり台のように身体を使う遊びに参加したり、独占したいため友だちと衝突したり、かなり成長がみられる。

☆　☆　☆　☆

家庭で母親と二人だけですごす中では得られない多くのことを経験したと思う。年上の子たちが歩きまわるのに刺激されたり、広い乳児室のあちこちに移動しなければならない必要からか、歩きはじめは比較的早く、十一ヵ月はじめには、七、八歩ひとりで歩いた。また子どもたちのおしゃべりの中で遊ぶうちに、声を出すことに興味を示し、アーやウーという音が、ハイとかダーチ・ブーブーということばに変化した。

刺激が強かったために習得したものも多かったが、家庭にいるよりも多くのフラストレーションもあわせて経験したことはいなめない。

子どもが喜んでしたこと

正確には、多分、喜んでしたと思われることである。比較的長時間おとなしく熱中して遊んでいたことをひろってみると、ほとんど親の目が届かない所で、ひとりで黙々としていたことである。つまり、どんなことをしてもすぐには禁止されず、思うままにしていられた場合で、たとえば次のようなことがある。

・カセットテープを箱から出して、テープの部分をどんどん長くひき出し、ごちゃごちゃにする。うまくひき出せない時でも、力を入れてひっぱったらしくテープは細くよじれてしまっていた。

・粘土を缶から出して小さくちぎり、ままごとのなべ、ちゃわん等に入れ、次にあちこちに散らして歩く。

・哺乳ビンの牛乳を、ポタポタとふとんや新聞紙、その他あちこちにたらして歩く。ぬらした部分を手でごしごしこする。

その他この種のことは、数限りなくある。どれをみても、実に楽しそうに熱中して遊んでいる。しかし親として管理上みると、どうも充実しているからと続けさせるにはかなり抵抗があり、勇気のいることである。したがって親にみつからずに続けられた間は、子どもにとってはしあわせな時だったであろう。

すぐにやめさせたいこのような遊びの中に、子どもの生きがいに結びつくようなことがみられる。このようなことを通して、大人のまねをし、大きくなったつもりになったり、偶然に気づいたことを続けているうちにおもしろいことを発見したり、成長の階段を急に数段登った気分にひたれることであろう。このように子どもが楽しんでいるスリルのある遊びを、子どもが理解できない大人の勝手な都合で無理やりやめさせたり、その上叱ったりするのであるから、なんとも子どもにとっては受難である。時には、やめさせた後になってから気づき、別のものを与えたり、それと同じようなことを経験させるにはどうしたらよかろうと、ほんの少し考えたりはするが、児童学を学んだ母親としてはまことに面目ない話である。

友だちと遊びたい

楽しいことをしていて叱られるなら、親の目の届かぬ所に逃げようと友だちを求めるのではないことをひそかに望むのではあるが、一歳後半から言葉や行動がかなり活発になり、友だちと遊びたいという気持ちが強くなってきた。最近は一日五時間ぐらいは、二歳～五歳の友だちと遊んでいる。友だちと遊びはじめたころは、「ママモー、イッチョー」と手をひっぱられ一緒について歩かされたが、最近は、「オカーシャーン、バイバイ！」と手をふって帰れと催促され、ひとりで友だちの中に入って遊ぶことが多くなってきた。

年齢の高い子と遊んでいる時は、行動範囲が広くなり、さがしまわらねばならないことがしばしばある。ある時は建築工事場の砂で砂遊びをしていたり、ある時はトマト畑でトマトをもいで、それを地面にこすりつけ、トマトの汁で地面の色が変わるのと、トマトがこするたびに小さくなることを楽しんだりしていることもあり、親の保護不足を責められそうなことが起こったりもする。

相手が年上か年下か、力が強いか弱いかの判断は実に敏感で、相手が年下で弱いとわかると、さっと近よりおもちゃを取ってしまったり、つきたおしたりするが、相手が年上でとうていかなわないと直感すると、攻撃せずにおとなしくみている。

遊びをみていると、友だちと一緒に遊んでいても、まわりの人とは無関係にひとりで遊んでいることが多い。自分のペースで他の子に語りかけ、反応がなくても平然と遊びを続けている。

このような時は、割合好きな遊びに熱中しているときである。

友だちの後をついてまわり、年上の人の遊びを見ていたり、遊びをまねようとすることもしばしば見られる。〝ひとまねこざる〟のごとく、なんでもまねをしてみたがる。ごっこ遊びが子どもに好まれるのもこのためであろうと、つくづく感じさせられる。友だちの遊びをまねたり、ごっこ遊びのような遊びはとても多い。

☆　☆　☆　☆

・小学生が〝あぶくたった〟をしているのを見て、「アブクタッタ、ミネタッタ」「ムチャムチャムチャ」と髪の毛をごちゃごちゃする。

・砂場で遊んでいて、他の子が立てば立ち、すわればすわり、手をこすればこすり、砂をすくえばすくいと、一つ一つの行動をまねる。テレビを見ていても同じようなことがある。

・おもちゃのベビーカーにお人形を乗せて、もう一つのお人形をおぶい、買物かごを二つ三つぶらさげて、「オカイモノ！イッテマイマーシュ！」とあちこち行ったり来たりする。

・お人形をトイレにつれていき、「チッコ？チーチー、デタ？」「フキフキネ！」といつも自分がされているように言葉をかける。

・小さな缶をコップにみたて、スプーンでガチャガチャかきまぜて、スプーンを口にはこびたべるまねをする。

☆　☆　☆　☆

友だちとよく遊んで、生き生きと動きまわっている姿は、子どもにとって満たされた時をすごしている姿と思われる。こんな遊びの中から生きがいを感じ、成長した時に役立つ時であってほしいと期待しながら、次々とめまぐるしく動きまわる子どもをみている。

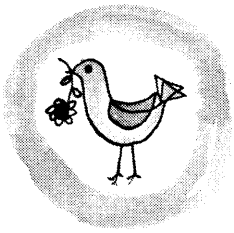
おわりに

子どもの生きがいということ、どんな時に生きがいを感ずるか、どうしたらそのような機会を与えてあげられるか等を考えてみた。わが子と共にすごしたこの二年余、あまりにも望ましくない親であったことを反省せざるを得なかった。子どもが成長した時、充実した子ども時代をすごせたことを喜んでもらえるような、そして親としても満足のいく日々をつくり出せたらと、自分の育児態度を考えなおしている。子どもの生きがいというよりもむしろ親の生きがいかもしれない。

（東京保育女子学院）

ピーボディー・ナーサリー・スクールにて

土屋美代子



夏も過ぎはや秋の気配も濃くなった九月のある日、長男広晃のナーサリー・スクールが始まりました。その年の四月末、二人の子ども―一歳半の女の子、それに七月に三歳を迎える男の子―を連れて、アメリカ・ケムブリッジに参りましてから、すでに五ヵ月近くが経過しておりましたが、まだカタコトの下の子はともかく、上の広晃はまだ、Hi.、とか No.、しか口にしません。ちょうど渡米するころ、やっと、かなり複雑な情況や、自分の感情等も表現できるようになり、得意そうに友だち遊びをはじめていた彼にとって、言葉の通じない世界に、いわば逆もどりしたことは、大きなショックだったらしく、英語には大変抵抗を示しました。かなり神経質な上に、自己主張の強い子どもですので子どもながら大分いら立ったのでしょう。頻尿気味にはなるし、私どもがわざと英語を使ったりすると、「英語でお話しないで!!」というありさまでしたが、次第に緩和して、九月始めごろには前述の始く Hi.、などと気安くいったり、「エッチューミー（Excuse me）っていうのはごめんなさいっていうことなんだネ」等と英語に興味を示しました。私もホッとして、この分ではナーサリーでも何とか大丈夫かと期待したのですが、私の甘い予想は見事に裏切られました。広晃は初日から大変用心深く、ほとんど私のそばを離れようとしません。何か遊具を持ってきては私のそばにすわりこんでやるありさまです。ここでは子どもに無理がなく自然に離れられるようにするという方針でしたので、初めのころは十人ほどの母親たちがおりましたが、ついにイスラエル人と私二人きりになり、そのうちに私一

人とり残され、一ヵ月余り子ども共々ナーサリー通いということになってしまいました。

おかげで大分期待がはずれましたが、その代り、はからずもこの国の幼児保育の一部をのぞき見ることができ、大変興味深く過ごすことができました。

私は、学問的な保育というものには全くの素人ですので、何から記してよいのかわかりませんが、まずこのナーサリーの所在地は、ケムブリッジのチャールス河沿いにあるピーボディテラスという、ハーバード大学の既婚者のためのアパートの中にあり、二人の特別待遇（無料）の園児を除いて、皆何らかの形で大学に関係のある人々の子どもが対象とされていました。月謝は年額三百ドル。生活感覚からいえば一ドル百円か二百円ぐらいでしたから、総額、三万～六万円で現在の日本の私立幼稚園なみです。この金額は、他の教会、小学校附属のものに比べても決して高い方ではありませんでした。入園はもちろん、試験などはなく、定員になれば締め切りというもので、したがって入園費とか〇〇費等というものは一切なく、その上、先生方の給料を含めた会計報告が示されており、アメリカ人の明快、合理的な一面が見られます。

クラスは午前（八・四五～一一・一五）と午後（一・一五～四・〇〇）があり、午前中は二歳八ヵ月から四歳までの子どもで、午後は五歳児にあてられており、午前中のクラスはおむつのとれていることが条件だったように覚えております。生生方は、園長先生―午前は副として、午後は主として両方受け持ち―と、他に二人の先生、二人の助手で、五名でした。児童数は二十四、五名でしたから、本当に手の行き届いた保育態勢といえましょう。

先に園長先生とかきましたが、ここのミセス・コーネル（必ずミセス・あるいはミスをつけて、みょう字で呼ばせていました）は、日本語の『園長』からくるイメージとはほど遠い三十歳前後の魅力的なイギリス婦人で、ご主人の病院勤務のためにアメリカにこられた方で、精いっぱい仕事をし、子どもたちと共に楽しんでいるという感じの方でした。午前保育の主任は、お孫さんもあるミセス・ハイタワー。もう六十過ぎとお見受けしましたが、余裕のある暖かい、それでいて年を感じさせない生き生きとした軽やかな身のこなしで、子どもたちとダンスをされる姿は、幼児教育者の理想像のようにさえ思えました。事実子どもは大

変お慕いし、今でも「ミセス・ハイタワーの所に行こうよ」などと申します。もう一人の先生は、まだ大学を出たてだったのでしょう。他のお二人から比べると、大分固い感じでいらっしゃいましたが、三人ともいつもきれいな明るい服装、あるいは美しく華やかな花模様のスモックをはおったりされ、このような点でも子どもたちの心を楽しくひきたてるように気を配っていらしたように思われました。これは日本人の私だけが感じたことかもしれませんが、帰国致しましてから、日本の幼稚園の先生は、どうしてあんなに地味にしていらっしゃるのだろうかと思いました。幼稚園の中では、もっとふんい気を明るくする、子どもの心に訴えた服装をなさってもよいのではないかという疑問がわきました。

さてその保育の方法ですが、お茶の水の自由保育等というものは一切知らず、いわゆる集団保育を予想していた私はびっくりしてしまいました。先生に朝のあいさつをする、"Good Morning,Mis,Hightower,""Goog Morning,Hiro!"絶対に欠かしたことのない先生からの明るいあいさつを受けると、後は全く個人の自由です。おもちゃで遊ぶもの、工作をするもの、外で遊ぶもの……ここの段階から欧米人の自分は自分という独立独歩の性格が作り出されるものかと、早合点したものです。

部屋はL字型に二部屋あり、南北はガラス張り、縦長の部屋の西側の壁は天井まで長四角に仕切られたたなで、いろいろなおもちゃがおいてあります。そしてその横にはボクシングの練習用の砂袋が下げられ、部屋の中央には、ハサミ・クレヨン・のり・紙類といった工作用品のおいてあるたながあります。すべて子どもが自由出し入れできるように配置されています。東側の壁ぞいには、四脚のイーゼルが配置され、それに手洗い用、台所用品用の流しが続きます。横長の部屋の突き当りはお家ごっこのセットがあり、一方のすみには本だながあり、その下はベンチになっていました。南側には小さな庭がついており、すべり台、砂場、三輪車等がおいてありました。もっと広い遊び場は少し離れた所にあります。こうしてみると、面積としてはそう広いものではないのですが、変化があり、また絵の具のそばには流し、本だなの下はベンチというように、神経細かに部屋作りがされています。

壁のたなにおいてあるおもちゃは、Lego のたぐいの組

み立てるもの、その他パズルとかおもに Play School 社で作っている、遊びながら学べるというものがほとんどでした。そして子どもが何か持ち出して遊び始めると、先生がそばへやってきて、教えたり遊んでやったりするのです。ですから、あくまで子どもの自発性を重んじ、興味を示したらそれをとらえて伸ばしてやるという態度で臨んでおり、正直、私はこのように保育される子どもは幸福だと思いました。しかしながら、このやり方にも問題点があるように思われました。つまりこのような状況のもとにつれてこられることは、子どもにとっては、一度にたくさんのおもちゃを与えられたのと同じになってしまいます。その結果家に帰ってからもすっかり落ちつきがなくなり、ソワソワと飽きっぽくなって困りました。他の日本人の方も同じようなことをいっていらっしゃいました。三歳の年齢であれだけのものが自由になるというのは少し早すぎるのか、または、これが他人に左右されない自分を見つける力をつけるために通らなければならない免疫をつけてもらう関所なのか、私にはわかりませんでしたが、このソワソワがおさまるのにはずい分長い期間かかりましたし、今でもおさまっていないのかもしれません。

こうしたおもちゃ類の他に、毎日、絵の具、工作が用意されていました。絵の具は、配色のよい三色が毎日取り換えられて用意され、子どもたちは物を描くというより、色彩の変化を楽しんでいるようでした。工作は、これまた毎日違うものが用意され、子どもも楽しみによく作って帰ったものです。内容といえば、単純な、無理をしなくてもできるもので、記憶しているものを記してみますと、

●Finger Painting.（これをやっている時の目の生き生きしていること！）

●二、三色の細長いラシャ紙でマット作り

●秋には落葉を利用した壁かけ

●適当な大きさのボール紙、ラシャ紙にのりを貼り、そこに、貝がら、赤いいんげん豆、また色をつけた米粒、くず毛糸等をはりつけるもの

●大きな針で端布縫い

●ストローやマカロニに色をつけて首飾り等をつくる

●牛乳ヨーグルト等の空箱の利用

等々がありましたし、また祝日に合わせて、砂糖飴をつけたリンゴを作ったり、ゆで卵の色つけ、クリスマスの飾り作りなどもありました。このように個々でやるものの他に、

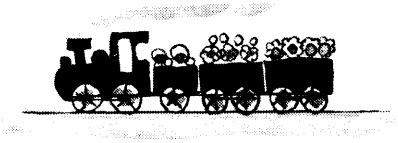
四、五人が協力しなければならない大きなぬいぐるみを作ったり、また、実際に生のリンゴから、アップルソースを作ったりもしていました。そして大切なことは、この時に作ったものはその日に持って帰ったことです。完成品からはほど遠いですが、今日はこれを作ったと子どもは満足して親に見せ、親も子どもが何をしてきたか想像がついたものです。

これらのものを含めての一時間半余りがすぎますと、今度はおやつとなり、先生を囲んで皆で「ジュースとクッキー」をいただきます。その後の十五分ほどは、皆で歌を歌ったりのいわゆる集団保育的なことをしていましたが、この時も強制的に皆を参加させるのではなく、自然に興味が向くように仕向けていらっしゃいました。その後は大体外で河風に吹かれながら遊んでいたようです。ほかに、訳も分らず怒る子どもには皆から離れてカナヅチで釘を打たせたり、またうさぎに餌をやったりでナーサリーの二時間半が終わります。

最初は手こずった広晃も、二月、三月経つ内にすっかり楽しみに通うようになりました。よく考えてみると『〇〇をしてはいけない』ということを極力なくした保育だったと思います。個々の子どもたちの、何ものにもゆがめられていない創造力を、素直に伸ばしてやることに主力が注がれているように思われました。そしてこのナーサリーの場合は、おやつのあとで、短時間ではありましたが、皆で一つことを一斉にやるということもとり入れてあり、また手の行き届いていることから、ほったらかしの自由というゆがみがほとんどみられなかったように思います。しかし、いわゆる強制的な行動を要求されることがないので、何か忍耐力、執着力に一つ欠けてしまうような気がしました。これは、アメリカの大人と子どもの世界の違いに厳しい家庭のしつけ、ひいては、神という絶対者の存在する厳粛な宗教的ふんい気の中につちかわれるのかもしれません。この点に甘くあいまいな日本に、こういう形の幼児教育がそのまま導入されることは問題がありますが、このナーサリーでの保育には捨て去るものは何もないように思われました。

これを書くに当たって、広晃に「アメリカの幼稚園好き？」と聞きましたところ、「お遊びは好き。アー〇〇やりたいなあ。でも『No, No』っていっていじわるするからいや」といっておりました。子どもには言葉の通じる友だちのいることが一番のようです。

米国で保育を受けた私の子ども



藤田美南子

お茶の水附属幼稚園で現在お世話になっている長男孝一が生まれた時、夫は米国中西部のとうもろこし畑に囲まれた小さな田舎の大学町（電話帳の厚さが一センチぐらいしかない）にあるインディアナ州立大学において、既に教鞭をとっていました。私は生まれたばかりの孝一をキャリングベッドに入れ、五歳と三歳になった長女と二女には、小さなリュックサックを背負わせて、旅客機に乗り込み、シカゴまで迎えに来た夫と合流して、二回目のアメリカ生活を始めました。この時の長女と二女が受けたアメリカでの幼児教育の印象を、思いつくままにつづってみたいと思います。

夫の勤務していた物理教室の主任教授の奥様の奔走で二人の娘は運よく、教会附属のプレスクール（Preschool）の五歳児、三歳児のクラスに入園することが許されました。どのクラスの人数も男六名、女六名という小人数から成り、午前と午後の二部制になっていました。満員の場合、入園希望者は Waiting List にのせられ、空席ができるまで順番を待たねばなりません。Participation と呼んで一学期に一、二度母親は担任の先生の手助けをし、部屋のあと片付け、掃除をし、ずっと子どもを観察しながら、保育の手伝

いをする義務がありました。

長女の担任の先生 Mrs. Millet は園長（Director）をかね、小柄でぴちぴちした女性で、普通のアメリカ女性と異なり重い荷物を持って、自分から先に立って階段を急ぎ足に上り下りされました。クェーカー教徒であるというミラー先生は、万事はっきりした意見の持主で、その気持ちのよい人柄と共に小さな町では評判の先生でした。たとえば、寒い雪の朝、送りに行って子どものオーバーを脱がせてやろうとすると、「彼女は一人ですることができます」といわれてしまいます。行儀作法についても考え方の違うアメリカとて、先生が生徒たちに話しかけている間は、机の上にひじをついていてもよい、床に寝そべっていてもよい、どんな姿勢でも、必ず眼だけは先生の眼を見て、きいていなければいけないというのが鉄則でした。

またつねづね、子どもにどんなことでも強制（force）してはならないと強調されていたことが思い出されます。ある時、園外保育で写生をすることになり、娘は見物人の多いのが気になり、いくらすすめられても、もじもじするばかり、とうとう涙が出てしまった時、「泣くほどしいて、私がわるかった」とあやまられてしまいました。

この点ではミラー先生にかぎらず、普通の家庭でも「ピアノを弾かなければおやつを上げません」などといって子どもにおけい古ごとをしいたりすることは見受けられず、子どもの気持ちをまず大切にしているようでした。

さまざまの個性をもったアメリカの子どもたちの中でも、特に女の子の社交的なことには眼をみはるほどでした。初めて教室に子どもを連れて行った時、「日本から飛行機で来た新しいお友だちにいろいろ助けて上げたい人？」という先生の問いに、すぐに「はい」と一人の女の子が名乗り出ました。「私の名はミッシー。私が助けてあげます」と私の所にやって来て私の胸のブローチをみて「すてきなブローチね」と話しかけられ、どきまぎしたことでした。こんな友だちに囲まれて、引込み思案の私の娘も、言葉も通じないままに、その日から楽しい毎日を送りました。ある日、二女が、「今日は男の子のダニーにいじめられたよ」とおこって帰って来ました。そのことは先生もちゃんと知っていて、「ダニーは、何とかして愛情を表現したいと思ってほっぺたを両手で引張ったのだから、悪く思わないように。家では何といっていただろうか」と心配してたずねられました。

クレヨン、はさみ等はすべて幼稚園備えつけで、はさみの⅓くらいは左利き用で色で区別してあります。子どもの身体の大きさほどもある紙を与えて、絵はのびのびと書かせます。三歳児には三原色、五歳児には六色ぐらいの絵具と、太い筆を与えて好きな色を作らせます。

毎学期のはじめ、お父さんの古ワイシャツを寄附させ、袖など適当にきってスモック代りに着せ、皆ボロを着て思い思いの絵をかきます。それぞれが何かを考えて、前衛的な、抽象画を書いています。ある時は工作でしょうか、いろいろの形のマカロニに色をつけ、糊で紙の上にのせたり、はらせたり、立体感を養ったりしました。日本の習慣では食べ物を遊びに使用することは考えられないので思わず眼をみはってしまいました。こんなふうにしてできあがった抽象画の中には、いろいろ教育を受けてしまった大人には、とてもできない天衣無縫なものがあり、アパートの居間に飾ってみたりしました。

すべて、自分のペースでやれということか、紅白にわかれて「用意どん」というような競走は、いっさいありませんでした。しかし学期末にはスクールパーティーといって、子どもたちが皆でお菓子を焼き、親たちの名札を作り、招待状を送り、その日は親も子どもたちと一緒に遊んだり、子どもの給仕してくれるお茶やお菓子をたべて楽しい半日を過ごしました。

クラスの人数が少ないので、眼が届きやすいからでしょうが、生徒の数だけの金槌、のこぎりなどの大工道具が揃っていて、自由に木を切ったり金槌でたたいたりできるので、特に長女はこれに熱中していたようでした。

時々園外保育があり一本の綱に十二名の園児をつかまらせ、スーパーマーケットの冷蔵庫を見学させたり、飛行場、博物館など連れて行ってもらいました。しかしクラスの中でいたずらで、どうしても団体の規律を守れぬトニーという子がいて、ついに後期からその子だけの付添いの教師をつけることが要求されました。こんな時は教育学部の学生が雇われ、一日付き添って監督していました。このように一見、自由で何の拘束もないように見えながら、他人に迷惑をかけてはならないというしつけについては厳しい面もあります。

毎回、保育の中ほどにクッキータイムがあって、お菓子とジュースが紙コップに配られます。子どもたちの中の当番が配り、配られた子どもは、必ずはっきりと「ありがと

う」をいうことを要求され、食べる前は皆、姿勢を正して食事の祈りを唱えます。

私の子どもたちが滞米中に受けた保育は、一口にいえばこんなものでした。初め、口が重くて、いっこうに英語を話そうとしない子どもたちのことを心配され、「私の方が日本語を習おう」とクラス中で日本語の単語を覚え始めたこともありました。それでも帰国近くなったころには、毎日家で話している日本語もおかしくなり、反対に英語は、親もとても真似できぬ、見事な発音をする事ができました。帰国してしばらく「ゴファン」「オファシ」とハの発音がファとなっていたのも時と共に正しい日本語になり、英語はすっかりぬけてしまったようです。

このような、子どもにとって迷惑だったかもしれない、親の都合で過ごした外国生活が、どんな影響を子どもに及ぼしたか、はっきりと私には判断がつきません。しかし帰国当時、日本の幼稚園や小学校で、頭を下げておじぎをしない、アメリカならよいが教室での行儀が悪いなどと注意を受けたりして、本来引込み思案だった子どもが、すっかり自信をなくし、更に消極的な子どもとなり親をあわてさせる時期もありました。やがてその長女も小学校高学年となり、何でも思ったことは物おじせず、どんどん主張する、負けん気の強い子どもに変身してしまい、今ごろ、アメリカでの保育の影響が表われたのだろうかなどと思う、このごろです。

今でも断片的に覚えている外国生活の思い出が、何か国境は越えても人間は一つというような国際感覚を持ち続けてくれればよいがと願っています。帰国のとき、クラス友だちの前で、日本の歌「夕やけこやけ」を元気に歌って、ミラー先生に「本当にうれしかった」といわれたことなど是非、胸にしまっておいてほしいと思います。

アメリカで知り合ったインド人の友人が、語ってくれた、「インドの家庭教育の理想は、五歳までは専制君主として、五歳から十五歳までは奴れいとして、十五歳以上は真の友人として」という言葉を思いおこしつつ、自由奔放で、個性を育てながら、一本しつけの厳しさが通っていたプレスクールの教育のよい点を、三人の子どもに残したいと心がけています。

ぜいたくな空

わんさと
雪が積もった朝に
オトキさんは死んだ。

おはぎをとどけにいった
となりの嫁さんが見つけたのだから
ほんとうは夜のあいだに
死んでいたのかも知れない。

電報で呼び寄せられた
四人の子どもたちは
いずれも遠い町にいて
末期(まつご)の水もとれなかった。

はそべ ただし

山奥の村から嫁に来て
炊事とのら仕事ともめんがすりと
ごはんとみそしるのほかは
何ひとつぜいたくを知らない
オトキさんだった。

子どもたちが
どんなに町へ呼ぼうとしても
一向に耳をかそうとはせず
手をやいたすえに
金やめずらしい食物や衣類などを送り
せめてもの孝行としたが
かけつけた家に

目をとじているオトキさんは
相も変わらぬせんべいぶとんの上に
もめんがすりをまとっていた。

マットレスは新しいまま
おしいれに積み重なり
着物は一度も手を通さずに
タンスの中にしまってある。

子どもたちは
むだな孝行に顔を見合わせ
はらをたて涙を流し
ふかふかのふとんを出して寝かし
ありったけの着物をとり出して
オトキさんを包んだ。

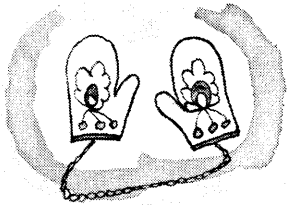
オトキさんは
初めてのぜいたくに
はずかしそうに
ほおをうずめた。

翌日
降りたての
まあたらしい雪を踏みしめて
オトキさんの葬列は
墓地へむかった。
まれにしかない
ぜいたくな青空が
盆地の上をすっぽりと
おおっていた。

はそべただし詩集
「ぜいたくな空」より

子どもの興味と母親の態度

西本美節



問題

幼児の生活は、食事・睡眠・排泄などの生理的生活以外の時間を、すべて遊びや仕事に費やしている。しかも、幼児は仕事でさえも遊びの一種と考えてしまう。遊びは幼児の成長を助け、興味を増し、興味は生活に積極性をもたらす。興味の示し方は、それぞれみな違う。遊び時間・遊び場所・遊び道具などの地理的・物的環境や、遊び仲間のような人的環境に左右される。興味の深さは、一時的だったり、長時間熱中することもある。いずれの場合も、子どもの興味に対して〝親がどんな態度で接するか・どの程度の関心をもつか〟によって、遊びの発展や心身の成長が大きく影響されるだけでなく、その力は幼児の人格形成にまで及ぶ。核家族だけでなく、連帯感の薄い社会環境の中におかれている現代の幼児は、母親の言動から強い影響を受けることになる。生活の立場が違う母親と子どもとでは、子どもの興味と母親の要求とが合致することはむずかしい。また、母親の幼いころの育てられ方や、現代の社会的・経済的・精神的地位によっても、幼児に与える影響は異なるだろう。したがって、生活環境の要求による母親の言動に、幼児が抑圧を感じてはいないだろうか。逆に母親が幼児の興味の本質を知らずに、放任してはいないだろうか。

方法

幼児が何に興味をもっているか、その動機・時期・持続時間

第一表　地域別

	住宅地	郊外住宅	団地	農漁村	商店街	工場地帯	その他	合　計
実数	151	12	20	27	19	1	25	255
%	59.2	4.7	7.8	10.6	7.5	0.4	9.8	100%

第二表　職業別

	教　師	商業	サラリーマン	技　術	熟　練	農　業	その他	合　計
実数	15	33	151	8	19	8	21	255
%	5.9	12.9	59.2	3.1	7.5	3.1	8.3	100%

第三表　子どもの年齢別・性別人数

年齢別／性別	3歳児	4歳児	5歳児	合　計
男　児	44人	43人	46人	133人
女　児	60	35人	27人	122人
合　計	104人	78人	73人	255人

・興味の内容に対する生活の影響・現在の興味・以前の興味など七項目について、その母親に面接質問した。また、これとは別に現実の母子関係を知るために、幼児が一番興味をもっていることに対する母親の接し方（態度）を観察し、幼児と母親の言動を十五分間にわたって記録し分析した。いずれの場合も、調査対象者と家族的に親しくなり、調査されていると意識させないように配慮した。調査は昭和四十七年五月から十月までに実施し、対象となったのは阪神地区に住む二五五組の親子である。その地域別・職業別・対象幼児の年齢別・性別・人数の内訳は第一表・第二表・第三表に示したとおりである。

結果

一、母親との面接で得た幼児の興味について

(1)　幼児の興味について、男児では、ミニカー・怪獣人形・プラモデル・積木などのほか、昆虫に興味を示し、自動車（実物）などの機械類にも興味をもち、構成遊びには興味をもっているが、室内遊びでスケールが小さく、自己中心的な遊びが多い。女児では人形・ままごと・紙細工のほか、砂遊びや鉄棒・ボール・自転車など運動遊びに興味があり、遊び相手を求めて、連合的協同遊びをしている。TVについては、既に「TV視聴に

第四表　子どもが興味をもっているもの

	種　　類	男　児	女　児	3歳児	4歳児	5歳児	全　体
		%	%	%	%	%	%
A	a．ミニカー・汽車・鉄砲 b．怪獣人形 c．人　　形 d．ままごと　など	26.6	15.2	23.3	22.4	16.2	20.8
B	プラモデル 積木・ブロック・砂遊び 水遊び・粘土・折紙・切紙	22.9	23.2	24.4	23.9	20.6	23.1
C	文字・ローマ字・数・時計など	6.4	8.0	4.6	3.0	14.7	7.2
D	TV　など	11.9	5.3	10.5	7.4	7.3	8.6
E	絵本・百科図鑑　など	8.3	9.8	7.0	11.9	8.8	9.0
F	ピアノ・オルガン・歌　など	3.7	14.3	10.5	10.4	5.9	9.0
G	自転車・鉄棒・ボール　など	5.5	12.5	9.3	6.0	11.8	9.0
H	昆虫・動物・　など	8.3	2.7	3.5	7.5	5.9	5.7
I	自動車・お金　など	5.5	1.8	3.5	3.0	4.4	3.6
J	おしゃれ	0	3.6	2.3	1.5	1.5	1.8
K	友だち・同胞	0.9	3.6	1.2	3.0	2.9	2.2
		100%	100%	100%	100%	100%	100%

対する子どもと親の態度」（日本保育学会第24回大会論文集掲載）で発表したので、今回は省略するが、三歳男児はTVに興味を示し、女児は歌を歌ったり、ピアノをひいたり活動的である。四歳児は男女とも、絵本など言語面に興味をもつ。五歳児になると、発達の要求と母親の要望が一致するためか、急に文字・数などに興味をもち始める。女児が運動遊びに興味を示すのは好ましいが、それに比べ男児が消極的で受動的な傾向を示しているのは問題であろう。（第四表）

(2)　興味をもった動機については、親や兄弟などの家族に影響されるのは当然だが、男児では年齢に関係なくTVの影響を見のがすことができない。四歳児になれば、就園による幼稚園・保育所の影響が現われ、五歳児ともなれば、友だちからの影響が大きくなり、個人的な好みもはっきり表現されるために、「そのもの自身が好き」となっている。

(3)　興味出現の時期と頻度については、男児

第五表　興味に対する親の関心（単位 %）

項目		男児	女児	3歳児	4歳児	5歳児	全体
よい	夢がある、やさしくなる、社会性が育つ	44.5	61.3	55.8	45.0	54.1	52.0
困る	あぶない、うるさい、きたない、しんどい	15.5	11.4	11.7	15.0	14.8	13.6
助かる	世話がかからない、外で遊ぶから助かる	6.4	3.4	2.6	8.3	4.9	5.1
当然	年齢だから、男・女だから、時代の影響	31.8	21.6	28.6	26.7	26.2	27.3
なし		1.8	2.3	1.3	5.0	0	2.0
		100%	100%	100%	100%	100%	100%

では時期的に早く出現し一歳児から五歳児まで続き、三歳児を中心に興味の頻度も集中する傾向がある。女児ではあらゆるものに興味をもってはいるが、出現の後期は、一歳半過ぎごろからであり、三歳ごろを中心として遊びの種類が交替し始め、一つの遊びについての頻度は必ずしも高くはない。

(4)　持続時間は、幼児が興味をもっていることであるため、長くなるのは当然だが、男児では約52%が二時間以上も一つのことに興味をもち、しかも、年齢が長ずるにしたがって長くなっている。女児の場合は、二時間以上ともなると、約37%弱しかなく、だいたいは一時間以内で他の興味に移行している。

(5)　幼児の興味に対する親の関心については、だいたい子どもに対して好意的であるが、「困る」という理由では、うるさい・きたないなど親本位の考え方が多いようである。（第五表）

(6)　生活への影響という点では、技術の向上・集中などにとって有利なものであれば「好ましい」とし、日常生活がこわされるような点、たとえば、食事をしない・だだをこねる・泣く・親がくたびれるなどについては「好ましくない」としている。両者の割合は、「好ましい」が約48%、「好ましくない」が約37%となり、男児より女児の方がやや有利な面がみられる。

(7)　以前にもっていた興味については、前記の(1)と同様に、男

児ではミニカー・怪獣人形であり、女児では人形などとなっている。現在の年齢より低くなるので、積木などへの興味より、動くものや、投げたり、さわったり、持ち歩くなどあらゆるものを試し、動かすことに興味を覚えているのである。文字・数などには興味を示していないが、絵本や童話などには早くから興味を示している。

二、日常生活場面の観察によって得た幼児の言動に対する母親の反応について

(A) 第六表は、母子の言動の分類法を示したものである。母子の接触度を見ると、観察対象の89.4%が接触不良となっている。

第七表によれば、子どもの言動のうち全体としては「遊び」で最も多く現われ、四歳児では、なぜ・どうして？ の「質問」が第一位に現われ、「要求」は第三位である。興味をもって行なうとき、幼児にとってそれは遊びとなり、あらゆるものに好奇心・探究心をもつ幼児ならば「質問」も「要求」もこの年齢にふさわしいものであろう。

第八表は、母親の反応の仕方を示しているが、「静かにしなさい」とか、子どもの質問に無関係な「風呂へ入りなさい」などと命令し、「放っておく」、「ママの子でない」など脅迫したり、「教えたでしょ」・「甘えないの」と強迫する。一応叱りながら妥協してみたり、集中して遊んでいるのに、「困った子」・「わからん子」・「人に笑われるよ」などと批判したり、恥辱を与えたりしている場合が多い。

(B) 接触良好の母子はわずか10.6%だから統計的に有意ではないだろうが、接触不良の母子の言動と比較してみよう。

(1) 対話の仕方では、接触不良グループの母子は一回だけの単文形式であるが、良好グループの母子では、少なくとも四回以上のやり取りがみられる。

(2) 接触良好グループの母子の会話形式は、互いに複交が用いられ、幼児のことばも語いが豊富である。

(3) 話の内容としては、身近な小動物・生活科学的事象などが多く話題になっている。

(4) 対話のふんい気では、不良グループが投げやり的なのに対し、良好グループは、楽しい、ほほえましいユーモアのあるようすがうかがわれる。「看護婦さんて、どんなことするの」「お医者さんは偉いね」などと人の好意や仕事にも関心を示す子どもに対し、母親は仕事の内容や、心情などを幼児に理解しやすいことばで語りかけている。「お父さんは誰から生まれたの」「誰のおじいちゃんなの」「お母ちゃん小さいとき、なん

第六表　子どもの言動

大項目	小項目	内　　容
身体的行為	遊び	同じ遊びのくりかえし（怪じゅう・人形・ままごと・プラモデル・砂あそび・水あそび・積木　など） ボール遊び，走る，歌をうたう，ピアノをひく，小動物・昆虫をさわる　など
	行動	すわる，立つ，寝る，食べる　など
	攻撃	ひっぱる，たたくなど
言語的行為	要求	遊ぼう，○○しよう， ○○してほしい， （読んで，見て　など） 行こうよ， ○○できたよ　など
	質問	○○だね，○○じゃあないの， （お日さんだね，なんで入るっていうの，特急だね，なんで○○なの，石ころばかりや，なんでなの　など）
	呼びかけ	ただいま， お母さん，ママ， ねえー　など
	拒否	いや
	買収	買ってくれたら　など
その他		いいねェー 週刊誌などをみるなど

母親の言動

大項目	小項目	内　　容
言語的反応	命令	静かにしなさい，黙っていなさい，すわりなさい，○○しなさい，早く寝なさい　など
	禁止	だめ，○○したらだめ，やめなさい　など
	脅迫	泣いたらもっとおこるよ わからんのか，いいかげんにしなさい，一人でいなさい，放っておくよ，おくらへ入れるよ，知らん，買ってあげない， ママの子でない，○○になるよ　など
	批判	しょうがない子，あほな子，困った子，ききわけない子，うるさい子，わからん子，○○ちゃん悪い子ヨ　など
	恥辱	みんなが見ているよ，笑われるよ，誰もしてないよ　など
	体裁	行儀悪い，みっともない，かっこ悪い　など
	買収	○○してあげるから○○しなさい，買ってあげるから静かにしなさいなど
	強迫	約束でしょ，甘えないの，教えたでしょ，終りよ，あるでしょ　など
	妥協	一回だけよ，チョットだけよ，そうねー，ハイハイ　など
	容認	いやらしい，かなわんワなど
身体的反応	体罰	平手うち，火（タバコなど）を近づける，つねる，外へ出す，無理に取り上げる，無理にかかえて引き離す　など
	買収	食べ物などを与える　など
放任無視		黙って新聞・雑誌などを読む，知らん顔で他人とおしゃべり　など
その他		ママと遊ぼう，どうしてそうなの，1000円もするのよ，うるさい　など

第七表　子どもの言動

項目		男児	女児	3歳児	4歳児	5歳児	全体
身体的行為	遊び	28.9%	31.9%	36.7%	23.5%	27.5%	30.4%
	行動	11.5	12.4	11.9	11.9	11.9	12.0
	攻撃	3.3	1.2	2.9	1.8	1.6	2.3
言語的行為	要求	16.4	20.4	18.6	20.2	15.5	18.4
	拒否	11.5	13.4	11.2	12.7	14.5	12.4
	呼びかけ	3.3	3.2	3.2	2.2	4.7	3.2
	質問	21.8	16.5	13.3	25.8	21.7	19.2
	買収	0	0.5	0.3	0.4	0	0.2
その他		3.3	0.5	1.9	1.5	2.6	1.9

第八表　子どもの言動に対する母親の反応

母親の反応 ＼ 子どもの言動		遊び	行動	攻撃	要求	拒否	呼びかけ	質問	買収	その他	全体
言語的反応	命令	◎	◎	●	◎	◎	○	●		○	◎
	禁止	◎	○	○	◎	●	●	●		●	◎
	脅迫	◎	○		◎	○		●			◎
	批判	◎		●	○						○
	恥辱	◎	●								●
	体裁	○	○								●
	買収	○			○	◎			●		○
	強迫	◎	○	●	◎			◎		●	◎
	妥協	◎	●		◎		●	◎		○	◎
	容認	◎	○		○		○	◎			○
身体的反応	体罰	◎	◎	●		○					○
	買収	○				●					●
放任・無視		◎	◎	○	◎	○	○	◎			◎
その他		◎	◎	○	◎	●	●	◎		●	◎
全体		◎	◎	○	◎	◎	○	◎	●	○	

◎ 非常に多い　◎ しばしば　○ よく　● 少し

でぼくいなかったの」など家族関係の複雑さや、「神さんが、どうやって私をこしらえたの」など生命の神秘についても興味を示している。母親は子どもと一緒に考えたり、相談したり、答えを希望に移行させたり、神秘に共感したりしているのである。

結語

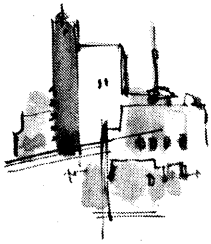
子どもの興味について母親はある程度の関心を示してはいるが、興味が子どもの発達にとって重要だという意味を十分に理解してないようである。家屋構造や家族構成の変化により、遊具やおもちゃがミニチュア化しているが、男児に怪獣などの人形が早くから与えられることによって、創造的・活動的遊びが減少しているのではないだろうか。女性の解放は女児の活発な運動を容認し、ままごとでも積極的に友だちを求めて遊び、遊戯活動は興味を盛んにし、知的学習へも積極性を現わす傾向がみられる。男児の場合、数の上では少ないにしても、自然や科学に対する興味は女児よりも深く、時間的にも興味の持続性があるので、この点に、周囲のおとなの関心を高めるならば、子どもの興味に対しさらに積極的に働けるのではないだろうか。実際の母親の言動をみれば、子どもはどこでどうやって遊べばわりに自由に遊べるかを知ることよりも、母親の都合で行動せざるを得なくなる。したがって幼児の語いも乏しく、行動も消極的になり、小ぎれいにまとまってはいても、遊びの内容は変化に乏しく、新しい遊びを創造することができなくなるのではなかろうか。幼児期は男女の区別なく、大きな社会的なわくの中で遊びを自由に選択させ、遊びや生活の中で子どもが示す興味について、真の価値を見いだした親たちの示す関心が、より創造的な、たくましい人間を作り出すのではなかろうか。

（神戸常盤短期大学）

「幼児教育の源流」（Ⅸ）

オベルリン

利島知可子



一　はじめに

近代教育思想家の中、コメニウス、ロック、ルソーなどは幼児教育の分野においてもすぐれた教育論を展開しているが、それらはおもに家庭教育を扱っている。彼らは、幼児は家庭で両親によって教育されるのが望ましいと考えていたので、彼らの教育論も主として家庭教育に限定されたのである。しかし、両親、とくに母親が家庭において子どもの教育ができるのは、恵まれた階級の家庭であって、生活のために働かなければならない貧しい家庭の幼児には、前述した思想家たちの教育論など適用されるはずはなかった。ところが、両親の労働中放任された幼児たちは、産業革命の発生とともに急増し、彼らの不幸な状態を救うためにも、幼児を対象とした新しい教育機関が必要とされたのである。もっとも産業革命の起こる以前、すでにマニュファクチュアの時代において、労働者の幼児を収容する施設が自然発生的にヨーロッパ各地に存在していた。それらの施設の名称はさまざまであったが、イギリスのデーム・スクールに代表されるように、特別の予備教育を受けていない婦人が経営していたのである。彼女たちは、わずかの月謝をもらって自分の家で子どもたちを保護し、時には読み方や裁縫などを教えていた。しかしこれらの施設は、スクールとは名ばかりの貧弱な非能率的な施設であったので、急増した労働者の幼児を教育するという重要な課題を果たすことは不可能であった。また貧しい労働者はそれらの施設に払うわずかの費用も出せなかった。

このような状況の下で、ペスタロッチーは、賃金のために仕事に出かけなければならない貧しい母親のために、就学前の子どもを世話をする〝子どもの家〟、あるいは〝貧困児救済所〟を設立したいと述べているが、実際に設立するには至らなかった。ところが、オベルリン Johann Friedrich Oberlin (1740-1826) 注①は、以前存在していた施設に比べて、制度的にも内容的にも整備した幼児保護施設を創設した。彼の施設は、ヨーロッパではじめて公的な性格をもった施設として注目されるだけでなく、後に設立された多くの施設の範となったのである。そこで次に、オベルリンの施設の位置づけや特質を明確にするための手がかりとして、産業革命期の幼児たちの状態や彼らのために設立された施設の実態について述べてみたい。

二　産業革命期における幼児教育機関

十八世期後半、イギリスをはじめとしてヨーロッパ各地に起こった産業革命は、単に産業上の変革にとどまらず、人間生活を根底からゆり動かしたのである。工業都市の出現とともに、農民たちは農村を離れて賃金労働者と化してしまい、少数の資本家たちに搾取されるようになった。そしてこれらの労働者の貧困と奴隷状態とがなかったら工業は存続することができなかったであろうといわれるほど、産業革命は大量の労働者の犠牲によってなしとげられた。労働者たちは、長時間労働、低賃金、貧困などの悲惨な状態に追いこまれ、さらに機械が改良されるたびごとに失業の危険にさらされていた。このような労働者の家庭を救うためには、婦人や子どもたちまでわずかな賃金をもらって働かねばならず、また機械の発明によって彼らの労働も可能になったのである。母親は日に十時間以上も工場で過ごし、ほとんど自分の子どもの顔さえ見ることができない状態であった。そして家庭というものは完全に破壊してしまったのである。

以上のような、労働者の貧困、堕落、家庭の破壊、児童労働などは、当時の幼児たちにどのような影響を及ぼしただろうか。まず、放任された幼児たちはあらゆる種類の危険にさらされて成長していた。事故死や傷害などの危険のほかに、道徳的に好ましくないこと、怠惰や虚偽、不従順などの性格を身につけ、犯行に走る者や両親にすすめられてこじきになる者もいた。そして彼らの死亡率は恵まれた階級の幼児に比べて圧倒的に高く、たとえば一八三五年ドイツのベルリンにおいて上流階級の子どもで五歳未満で死亡する者が5.7%であったのに対し、労働者の子どもは34.5%も死亡していた。①また一八四〇年ごろ、イギリスのマンチェスターにおいては、上流階級の子どもで20%、労

働者の子どもの死亡率は57％にも達していた。②さらに、貧困を少しでも救うために幼少のころから―時には二歳ごろから―工場で働く子どもがふえ、わずかな賃金で働かせることができたので、資本家たちも競って幼児を雇っていたのである。これらの子どもたちは場合によっては、日に十四時間もの労働をしいられ、仕事が終わると、ブランデー、タバコ、ワイセツ、トバクなどに休養を求めていたという報告もある。③

このような、幼児の悲惨な状態に心を痛めた当時の宗教家や有識者たちが、さまざまな立場から幼児教育機関を設立し始めたのである。それらの機関の教育内容も多様であったが、宗教・道徳教育、初等教育、手労働、身体の訓練などの内容は共通していた。まず、放任されている幼児は、将来無能力で怠惰な市民となり社会の重荷になるだろうという憂慮から、活動性、秩序愛、従順性、温和さなどの徳性を養うことが要求され、そのために、宗教・道徳教育が重視されたのである。次に初等教育が取り入れられたことは、生産性を高めるためには、読み、書き、計算などの知育を受けた労働者が要求されていたし、幼いころから労働にかり出されて初等教育を受ける機会に恵まれなかった子どもがかなり存在していたことによる。またこれらの機関は、おもに貧民や労働者の子弟を対象としていたので、将来のためにできるだけ早くから労働に慣れさせる必要があった。そこで、幼児にでもできるような仕事、糸のもつれを解くこと・レース、紙ひも、毛糸などを編むこと・紙袋の製作・わら、リボン細工などが行なわれていた。最後に身体の訓練が重視されたことは、特に健康で力強く活発な労働者を育成するためにも当然であったといえる。以上の教育内容からも明らかなように、これらの機関は真に幼児への教育的配慮から生まれたものではなく、必要に迫られて設立された慈善施設にすぎなかったといえる。ゆえにこれらの施設は発生当時には、(1)子どもを生み、育てるのは両親の義務であり、母親による教育の方が施設で教育するより好ましい。(2)下層階級の子どもに教育を授けると、彼らの中に不満や不充足感が芽生えてくる。(3)子どもを両親から引き離し、長時間緊張状態におくことは、彼らにとって望ましいことではない。(4)それらの施設は、本来賞讃されるべきものではなく、家庭教育に代わる非常手段で単なる間に合わせにすぎない。④というような批判も受けていた。しかし(1)幼児たちがあらゆる種類の危険から守られた。(2)精神的、身体的、知的諸力を発達させ、また特に道徳・宗教教育を重んじたことにより、教会や国家の秩序維持に貢献した。(3)両親や兄姉から幼児の世話を引き受け、彼らは仕事や学校に専念できた。

(4)幼少のころから働かざるを得なかった幼児のために初等学校の代用も果たしていた、などの点は評価されており、このような施設は時代の要請に応えて次第に増加していったのである。そこで次にそれらの施設の発端となった幼児保護施設の創設者であるオベルリンの生涯と、彼の施設の設立目的、教育内容、設立の背景などについて述べてみよう。

三、オベルリンの生涯

オベルリンは、一七四〇年ギムナジウムの教師の子として、ドイツのシュトラスブルクに生まれた。十五歳の時プロテスタント系のシュトラスブルク大学に入学し、神学と哲学を専攻した。そして二十三歳で哲学博士の称号を得た。一七六二年、二十二歳で大学を卒業し牧師の地位につくまでの三年間は、外科医、チィゲンハーゲン家の家庭教師となってはじめて教育経験を積んだのである。一七六五年に家庭教師をやめると従軍牧師となり、一七六七年には正式にスタインタールのワルドバッハ注②の牧師に任命された。そしてその翌年、シュトラスブルク大学の教授の娘と結婚し、彼女は施設の子どもたちのよき教師となったのである。オベルリンの任地であったスタインタールとは、語源的には〝石の城〟という意味で、その名の通り石の多い土壌と長期間続く悪天候は農業に適さず、また前述したような産業革命もまだ起こっていなかった。ゆえに住民たちは貧困に苦しみ、オベルリンはまず、住民の生活条件を向上させることに心を傾けなければならなかった。そこで彼は、牧場を作ったり、じゃがいもの栽培法を広めたり、橋や道路を整備してシュトラスブルクとの交通を可能にしたりした。また紡績工場を取り入れて産業の発展を計ったので、彼の着任当時には八十家族しか住んでいなかったワルドバッハにも、まもなく五〇〇から六〇〇もの家族が住めるようになった。

また、住民たちの教育条件もきわめて悪く、ことばは正しいフランス語とはほど遠い、全く地方的な日常語やラテン語系のなまりが使われていた。彼らの無教養は、経済的発展にとっても、また宣教の際にも大きな妨害となっていたのである。彼の教区には教会は三つあったが、学校は貧弱な設備のものが一つしかなく、彼は学校の設立も行なわなければならなかった。

以上のような社会事業や学校改革の一環として、幼児保護施設が設立されたわけであるが、彼は経済的、社会的、文化的発展のためには、七歳になってはじめて教育を行なうのでは不十分であると認識しており、そのために就学前教育を体系化しようとしたのである。そこで彼は一七六九年の冬、編み物をじょ

うずに教えていたサラ・バンゼット Sara Banzet という女性を教師として迎え、幼児保護施設を開設したのである。

彼は元来闘争的な性格の持ち主であり、幼少のころから軍人になりたいと思っていたのであるが、牧師の方がより多くの善を行ないうると信じるようになり、フランス革命当時にも教会の中でのみ古い秩序と戦っていた。このような彼の態度は革命に非協力的であるとみなされて、一七九四年から九五年にかけて過激なジャコバン党員により牧師の地位を追われた。しかし一七九五年には復帰し、一八一八年には、当時フランスの最高勲章であったレジョン・ド・ヌール章を受けたのである。そして一八二六年、教区の多くの人々に見守られながら八十六歳の生涯をとじた。

幼児教育史家のR・ラスクは「牧師オベルリンにとって本来の使命は、教区内の宗教の普及、経済的、教育的発展であり、幼児保護施設などは単に副次的なものにすぎない」⑤とみなしているが、オベルリンの死後も住民たちはこの施設を高く評価して記念の募金を行なうようになった。そしてその募金により、保護施設の教育に従事した者に対して年百フランの賞金を与えたのである。

四、オベルリンの幼児保護施設

前述したように、オベルリンが幼児保護施設を設立する直接的なきっかけとなったのは、一七六九年、バンゼットが近所の子どもたちを集めて編み物を教えていたのに出会った時である。着任以来放任された子どもたちに心を痛めていたオベルリンは、バンゼットを保母に雇い、子どもたちのために広い部屋を借りた。そこには三歳から六歳までの幼児が集まり、当時ではまだ珍しかった編み物も教えていたので、編み物学校、と呼ばれていた。このヨーロッパで最初に設立された施設も設備の不備や人手不足のためはじめの中、週に一、二回、後に月に十回程度開設されていたにすぎなかった。

この施設を訪問したある実業家は「オベルリンは、子どもたちがすることもなく村をうろついており、方言が唯一の言語として通用しているのを知って、そのような欠陥を根絶しようとした。そこで彼は夫人と協力して牧師を選び、大きな部屋を借りたり作ったりし、費用は自分で払った。これらの暖い広間には、あらゆる年齢の子どもたちが、女らしい母親のような保護のもとで過ごし、小さい子は遊び、大きい子は紡ぎ、編み物、裁縫を学んでいた。そしてそこでは方言を使ってはならなかっ

た」⑥と報告しているが、ここからも明らかなようにオベルリンは、施設の費用は自ら出していたし、保母たちの給料も自分で払っていたのである。また彼が施設を設立した動機もこの報告からわかるが、彼自身の言葉によると、まず第一に子どもたちは両親を助けるために働けるようになるまで、放任されているので多くの好ましくないことを学び、怠惰な人間になる。第二になまりのある方言は、フランス人に差別され、また説教や讃美歌を正しく理解できないと⑦、その動機について述べている。ゆえに彼は、保母たちに次のような使命を課していた。それらの使命の中に彼の施設設立の目的も明確にされているのであげてみると、

一、子どもの心の中に宗教的感情を発達させ、神への愛、両親・教師・恩人に対する尊敬と感謝、隣人愛を育てること。

二、子どもたちが秩序や労働を愛し、清潔、礼儀正しさ、善行、正直などを身につけるように導くこと。

三、短い宗教的な歌詞や格言を教えたり、物語をくり返し聞かせて子どもたちの記憶力を鍛えること。

四、フランス語を習熟して、子どもたちの不明確な方言を根絶すること。

五、歌の指導をして、子どもたちが教会での礼拝の際、歌えるようにすること。

六、散歩の際、子どもたちに植物の特色を教え、特に毒性植物には用心させること。

七、物語を話したり授業をしている間、子どもたちに年齢と能力に応じた手仕事をさせること。⑧

などであった。このような使命のもとに、内容としては、次のものが教えられていた。

宗教・道徳教育——道徳的なおはなし。お祈り。讃美歌。格言（特に聖書から取ったもの）。新、旧約聖書の中の物語。

知育——方言を除去するために会話の練習。〝銅版画〟による博物の学習。色彩感覚の訓練、木片や石を使って指示されたものを作る。

手労働——羊毛、木綿、亜麻、絹などの素材を分類する。いろいろな物体を色と形によって分類する。編み物。

ここに、宗教、道徳教育を重視していたこと、幼児の段階ですでに手労働を取り入れ、将来の労働者育成の役割を果たしていたこと、また初等教育も行なっていたことなど、前述した産業革命期の施設の原型を見ることができる。

彼の教育法の中で注目すべき点は、聖書の物語や自然現象など、子どもたちの理解が困難なことを教える際に、できるだけ

彼らの直観にうったえようとしたことである。そのために、彼自身が考案した、彩色した銅版画や図などを用いていた。また子どもたちが楽しいふんい気の中で過ごせるように、散歩や遊戯を重要視していた。そのような彼の教育法は、次にあげた彼の手紙から明らかにされる。「私の妻や私が養成した保母たちは、歴史や動物、植物などを描いた図を使って子どもたちを教育した。それらの図には短い説明に添えて、正しいフランス語と方言の両方で名称が書いてあった。そして彼らにまず、それらの名称を方言で伝え、後にフランス語の名称を教えた。また彼らの四肢をしなやかにさせ、健康な身体を作るため、身体を鍛えるような遊戯で彼らを楽しませた。晴れた日には散歩に連れて行き、その際子どもたちは植物を摘み、保母はそれらの名を教えた。すると子どもたちは大きな声でその名称をくり返した。これらすべての教授は、遊戯の中で行なわれ、彼らにとっては大きな楽しみであった」

彼はこれらの方法を教師たちに徹底させるため、前もって彼女たちに教授法を指導していた。そして一クラスには、彼の指導を受けた保母のほかに、年長の女の子が助教師として保育にあたっていた。

彼はカンペ J.Canpe (1746～1818) や、ロヒョウ F. E. Rochow (1734～1805) など、当時のドイツでは進歩的であった汎愛学派の教育学に精通していた。そして道徳教育の際賞罰の方法によって子どもたちを激励していた。たとえば教師は〝よい子〟の記録ノートを持っており、子どもたちの行動を三段階に分けて、すぐれたものから順に赤、緑、黒の点を書きこんでいた。そして学年の終わりに、優秀な子にはほうびと賞が与えられていた。このような方法によっては、一時的には子どもの行動が改善されるが、教育的には好ましい方法ではなく、廃止されるべきであった。注③

最後にオベルリンの施設をみる時、欠かすことのできない人物であるL・シェプラー Luise Scheppler (1763～1837) について述べておこう。彼女は、十五歳の時オベルリン家の下女として雇われてきたが、オベルリンの指導を受けて保育に従事するようになった。元来子ども好きな性格であり、オベルリンの死後も保育や保母養成のために大いに貢献した。その功績が認められてパリの科学アカデミーから賞金五千フランを与えられ、彼女はその賞金で、五個の施設を新設したのである。

五、おわりに

以上述べたようなオベルリンの施設は、当時の工場経営者、

商人、知識階級の人々たちから支持されていたのである。たとえば自然科学者であったB・キュヴィエは「イギリスやフランスにおける保護施設は、オベルリンの施設に由来しており、そこでは労働者の幼児が保護され、当時町に広まっていた悪習や事故から守られた」⑩と評価している。また彼にならって施設を設立することは政府によっても奨励され、財政的援助を行なった。そして一八四〇年ごろ、フランスには約三百三十もの施設が設立され、二万八千五百人の貧民の幼児が収容されていたと報告されている。⑪

彼の施設はフランスやイギリスだけでなく、ドイツにも影響を及ぼした。ドイツに幼児保護施設が最初に設立されたのは、一八〇二年デットモルトのパウリネ夫人 Pauline von Lippe (1769～1820) によってであったが、彼女はオベルリンの施設にヒントを得たのである。彼女の施設においては、**宗教・道徳教育**——道徳的なおはなし。新旧約聖書の中の物語。讃美歌。お祈り。格言。**知育**——文字の練習。会話の練習。計算。**手労働**——小石、花卉などを品分けし、大きさ、色、形、重さによって分類する。縫い物。（女の子だけ）編み物。⑫などが教えられており、この教育内容と、前述したオベルリンの教育内容を比較してみれば、明らかにオベルリンの影響がうかがえる。

このように十八世紀終りから十九世紀にかけて、時代の要請に応えた幼児教育機関が、あるものはオベルリンにならい、また他のものは彼とは全く無関係に、ヨーロッパ各地に増設されていった。そしてフレーベルが幼稚園を創設した一八四〇年ごろそれらの施設は、イギリスで四〇〇、フランスで三三〇、ドイツでは一〇〇あまりを数えていた。しかしそれらの施設は、すでに二、で述べたようにあくまでも産業革命期の歴史的産物であり、真に幼児の立場に立った教育が行なわれていたとは言い難かった。また社会的、文化的発展を計ろうという大きな視点の下で幼児教育の段階にまで目を向け、幼児のための施設を設立したことはオベルリンの卓見であり、彼が幼児保護施設の創始者として名を残しているゆえんである。しかし、彼の理論も思想的には未熟であった。そこで幼児教育機関を真に幼きものの福音の場となし、幼児教育理論を樹立するためにもフレーベルの幼稚園創設が待たれたのである。

（広島文教女子短期大学）

注

①彼はドイツで生まれ、ドイツで教育を受けたが、彼が牧師として着任したスタインタールが当時フランス領であったので、

フランス人とみなされる場合もある。その場合にはオベルランと発音される。

②この地方は当時フランス領であったので、バン・ド・ラ・ローシュと呼ばれていた。

③オウエン R.Owen (1771～1858) などは、子どもたちに愛情と信頼をもっていれば賞罰などは不必要なものであり、不公正なものであると廃止していた。

引用文献

① J. Kuczynski; Die Geschichte der Lage der Arbeiter unter der Kapitalismus. Teil I. Bd.I. 1961. s. 88.

② E. Bernstorff; Beiträge zur Geschichte der Vovschulerziehurg. 1961. s. 83.

③ F・メーリング・足利末男訳「ドイツ社会民主主義」上、ミネルヴァ書房、一九六八、四四ページ。

④ J. G. Wirth; Mittheilungen über Kleinkinderschulen und Rettungsanstalten für verwahrloste Kinder. 1840. s. 2 - 6.

⑤ R. Rusk; A History of Infant Education. 1956. P. 111/2

⑥ Dr. Hilpert, Stöber und Andern; Johann Friedrich Oberlins, Pfarrer im Steinthal, Vollstandige Lebens-geschichte und gesammelte Schriften. 1843. Teil. 2. S. 148 - 50.

⑦ E. B.-Bernstorff. u. a.; Beiträge zur Geschichte der Vorschulerziehung. 1968. S. 107

⑧ Dr, Hilpert. Stöber und Andern; a. a. O. Teil 3, S. 338 - 40.

⑨ Dr. Hilpert. Stöber und Andern; a. a. O. Teil 2. S. 480.

⑩ Ebenda. S. 149.

⑪ J. G. Wirth; a. a. O. S. 132.

⑫ J. Fölsing; Blüthen und Früchte der Kleinkinderschulen. 1880. S. 147.

参考文献

①小川正通「世界の幼児教育」明治図書、一九六六

②尾形利雄「産業革命期におけるイギリス民衆児童教育の研究」校倉書房、一九六四

③津守　真他「幼稚園の歴史」厚生閣、一九五九

④マルクス・レーニン主義研究所「イギリスにおける労働者階級の状態」大月書店、一九五六

幼児が絵を描いている時 (一)

ある四歳女児のなぐり描き

青木　隆

子どもが絵を描いているのを見ることは楽しい。連続的に小さな出来事が次々に現われ、しかもそれなりの前後の脈絡もあり、雑多な要因がからみあって一つの絵としてでき上がって行く。これから述べることがらは幼児の描画過程の観察記録を中心とするものであるが、これらの事例をとおして、幼児画を考えて見たいと思う。

1

初めにとりあげる例は、現在四歳二ヵ月になるダウン症の女児のものである。いまかりにY子としておく。Y子ちゃんは小さくて身長も体重もとても四歳児には見えないが、いたって元気である。そして湘南地方のC市が主催する障害をもつ子どものための「生活訓練会」に毎週三回かよっている。三歳になるとすぐ訓練会に入ったのでもう一年以上たったことになる。訓練会での最近のY子の生活ぶりを簡単に紹介しておくと……排せつもあまり失敗しなくなったし、食事もゆっくりだが一人で食べられる。衣服の着脱はほんのわずかの介助を必要とする程度である。またよく動き回り、特に音楽が聞こえて来ると体をリズミカルに動かして喜ぶ。ぬいぐるみをだっこしたり、砂遊びをしたりで一人きりでけっこう楽しそうである。言語はほとんどないといってよいが、こちらからの言語はかなり理解しているし、名前を呼ばれるとふりむいて返事をする時もあるという。ただ気になる点は体があまりにも小さく体力がないことであろう。

Y子が三歳九ヵ月のある日のことである。この日訓練会に集まった子どもは九名、大人四名の計十三名が福祉会館のプレー

ルームに入っていた。広い部屋の床にはB2ぐらいの大きさの紙が何枚もひろげられ、各自好きな所に勝手な方向をむいて筆で絵を描いていた。Y子はなんとなく集団の中心とおぼしきところから離れて陣取って足をなげ出してすわっていた。彼女は左ききである。

次にその時の十五分間ほどの行動記録をぬき書きしてみる。だらだらと冗漫であるが、できるだけ手を加えないことにした。（）内は補足的な説明か私の主観をまじえた臆測などである。

「緑色の絵の具のついた筆をゆっくりひっぱるようにして線を描く。この動作をしばらくくりかえす。筆がかすれてくる。立ち上がる。約二メートルはなれた緑色の絵の具の入ったコップの所に、まっすぐあるいて行き筆に絵の具をつける。自分の描きかけの絵の所にもどって来る。帰って来ると隣にいた男の子の位置が変わっている。男の子の背中が邪魔でさっきと同じ場所にはすわれない。しばらくうろうろする。三メートルばかり離れたところに何も描いてない新しい紙があることに気付く。その前に立って白い紙を見ている。（とりあげようとも描こうともしない）ふりかえって自分の描きかけの絵の方を見る。さっきの男の子の位置がまた変わって、Y子のすわっていた場所があいていることを見る。もとの所に帰っていそいですわる。絵の上におしりをのせてしまう。先生がY子をだきあげて衣服に絵の具がついていないかを調べる。Y子を下におく。おかれたままの姿勢で絵を描き出す。」

「立って筆に絵の具をつけに行く。緑色のコップから筆を出して筆先をジッと見る。コップのそばには紺色のセーターを着た男の子の背中がある。Y子はそのセーターに筆をこすりつける。そして筆をおしあてたあたりをのぞき込んで見る。（目が近いので顔を近づける。紺の上に線で描いたためか私にもよく見えない）今度は筆の穂先を二本の指ではさんで見る。指の先が緑になる。もとの位置にもどって絵を描く。」

「先生が青い絵の具の入ったコップを持って来てY子のそばに置く。中腰にしゃがんでいたが、足をなげ出して腰を落付ける。緑色の付いた筆を青の中に入れる。一筆ごとに絵の具を付けては線を描き、描いては絵の具をつける。しばらくはこの動作が続くが、絵の具をつける間隔がだんだんのびて行く。（つまり一回に描く描線の長さが長くなる）この絵の具はさっきの緑色より濃く溶いてある。（なんとなくようすが違うように感じたのかもしれない）筆の穂先を指でつまんでみる。指をジッと見て、自分の衣服に指をこする。筆の動きがだんだんおそくなる。同じところを何度も描く。画面はぬりつぶされて行く。

（新しく描いた線がどれなのか、そばで見ている私にも判別しにくい）再び筆の先をつまむ。筆の動きはますますおそくなる。筆はかすれてくるが、ゆっくり動かすだけで、絵の具をつけようとはしない。急に立ち上がる。（すぐそばにベタベタした絵の具の入っているコップがあるのに……）さっきの緑色の入ったコップのところへ行く。帰って来る。余白の部分に大きく手を動かし、はやい線を描く。連続的な左右の往復運動になり、やがて連続的に描点をうつ。ゆっくりしているが、リズムは安定している。」

「Y子は手を休め、いま描いている紙を持ち上げて見る。その下にもう一枚新しい紙があることに気付く。もとにもどしほとんど余白のなくなった紙に描き続ける。……筆がかすれて来る。上の紙を持ち上げて下の新しい紙に筆をこすりつける。わずかに色がつく。もとにもどして描いてみる。ほとんど描けない。筆の先を指でつまむ。指に色がつかない。」

このあとすぐにこの日の描画は終わる。先生が「Yチャンおしまいにしましょうネ」というと立ち上がり、先生に筆を渡した。

この記録をとおして感じられることは、Y子が一人きりで落付いて絵を描き、いろいろと試みていることである。描きにくくなった筆の先をさわって見たり、ベタベタの絵の具が気に入らなければ、離れた所まであるいてでも絵の具をつけに行く。「おやっ？」と思ったり、「おかしいぞ」と感じると確かめている。このような態度は大変いいことだと思った。しかしこの例にもあるとおり他の子が邪魔だと思ってもどけようとしたりしない。とりわけ他の人をさけるようすもないが、さりとて働きかけもない。まだまだ一緒に遊べるまでには長い時間がかかりそうである。

2

それから五ヵ月ほどたってY子は四歳二ヵ月となる。あいかわらず一人ではよく遊ぶ。先生たちにはあまったれるようになったが、一緒に遊ぶといえるような状態ではない。

そんなある日の午後であった。プレールームには、児童八名、市の専任の職員二名、ボランティア二名、それに私。各自適当にちらばって遊んでいる。先生がY子のすわっている床に画用紙と二十色のクレヨンを置く。

「すぐにクレヨンのふたをあけ、ふたを両手で持って頭の上に高くかざす。クレヨンの箱が画用紙の上に乗っているので、ずらして紙の左側におく。みどり色をとりあげる。」

このようにして描き始める訳だが、これから二十分ほどの間に、Y子は結局十六枚の絵を描くことになる。作品のおもなものは写真で示したので参照されたい。一見したところでは、すべてがいわゆるなぐり描きであって、変化に富むものとはいいにくい。しかし実際の描画場面を観察していると、確かめて見たり、ためらったり、はっきりと画面に現われない心の動きがみられた。私はY子のそばにつきっきりであったが、ほとんど口をきかなかった。たしかに私はこの訓練会に何度か顔を出してはいるが、Y子と一対一でそばにつきそったのは、これが初めてである。したがってラポートがついている訳ではない。それでも私はY子に無視されたり、背中を向けられたりはしなかった。

「一枚目が一段落してY子の手が画面から離れた時に、私は絵を描いた紙を新しい紙にとりかえた。一瞬なにもせず新しい紙を見ている。（描いてある絵をおさえて私に渡すまいとするような行為は全くみられなかった）緑のクレヨンを箱にしまい、赤を持ち二枚目を描く。」

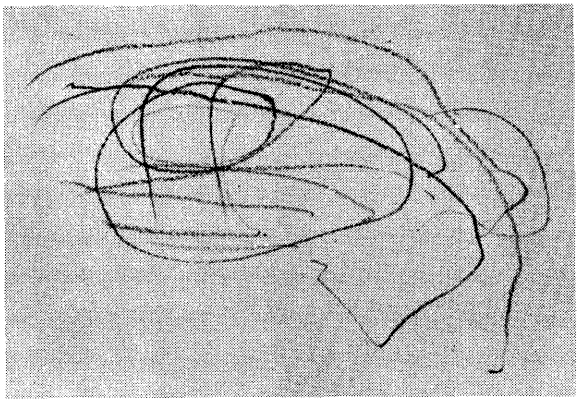
二枚目を描き三枚目となる。

「またクレヨンをとりかえて水色を持つ。クレヨンの先を見る。（水色はかなりの長さだが、先はすりへっていて紙に包まれている。紙をやぶいて先端を出すようなことはしない）水色を箱にもどし再び赤で描く。描き始めるとフォーと声を出す。一段落すると私の顔を見る。視線が合うが私が何もしないでいると、Y子は三枚目の画用紙をもち上げて私を見る。（まるで、終わったよ、紙をかえてちょうだい……というような感じである。二枚目、三枚目までは私ができ上がった絵をとりあげ次の紙をY子が描きやすい位置においてあげていた。三枚目の時初めてY子の方から絵を私に渡そうとした）私は四枚目の紙を持って彼女の前に差し出した。受け取って自分の前に置く。」

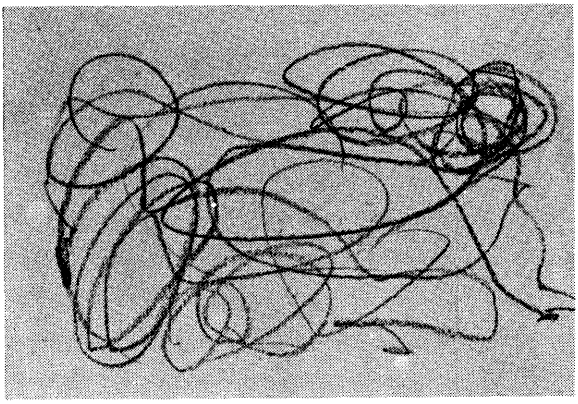
「四枚目、先の出ていない水色のクレヨンを再びとりあげて見ていたが、そのまま箱におさめる。私がクレヨンの先の紙をむいて箱にもどす。Y子は私のすることを見ている。すぐ水色のクレヨンを箱から出し、先端が出ている方を下にして持つ。きれいに描ける。手を大きく動かしたので、画用紙が動く。右手で紙のすみをおさえて描く。」

このようにして五枚、六枚と描き進む。七枚目の時、途中で手をとめ顔を上げ私を見る。視線が合うと笑う。そしてまた描き続ける。（描画中ばかりでなく、Y子はよく手もとを見ている）六枚目八枚目は茶色のクレヨンを使っていたが、角度によってはクレヨンを包んでいる紙がひっかかり、かすれたりする。

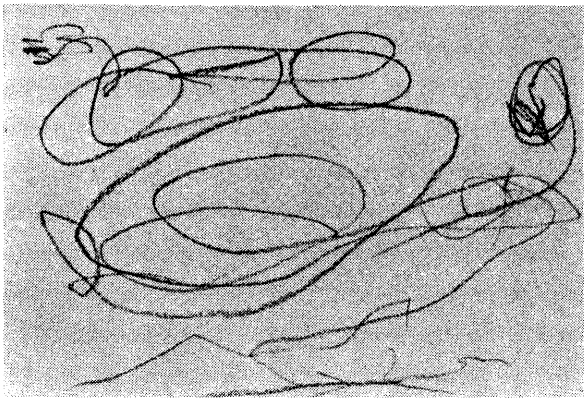
Y子（C・A　4：2）の作品、　16描中8枚、なぐり描きとしてはやや進んだ段階にあり、独立したマルや十字形が画面に現われるのも、それほど遠い将来ではなさそうである。（1歳後半から2歳前後の発達段階か）



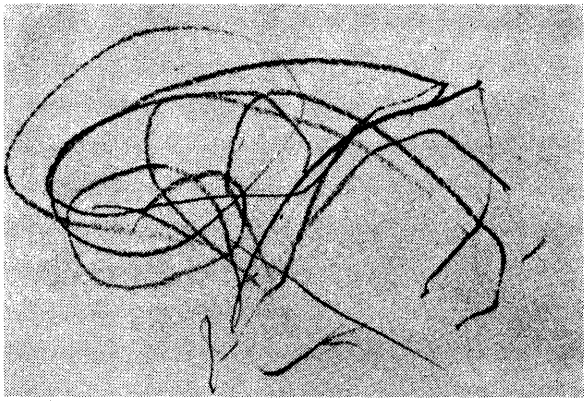
1枚目（緑色）



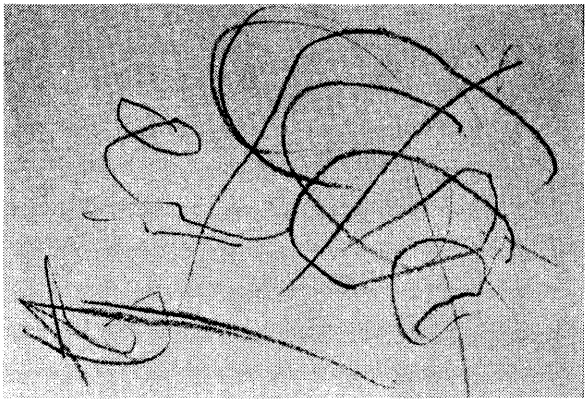
3枚目（赤）余白をさがして描く



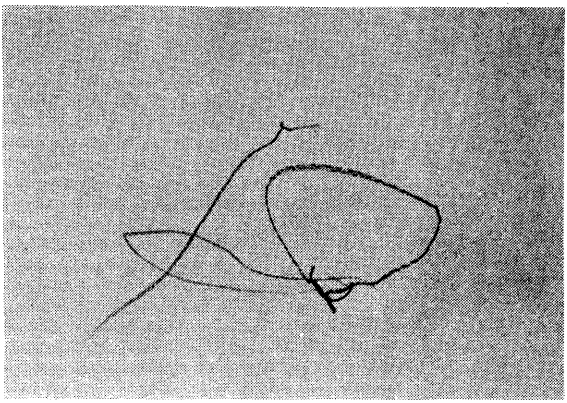
5枚目（赤）



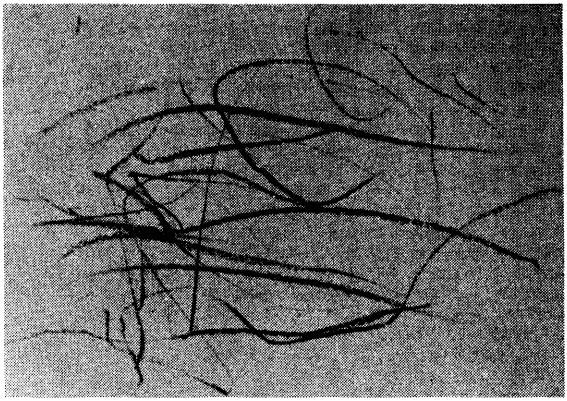
8枚目（茶）クレヨンの先の紙が時々ひっかかってかすれる



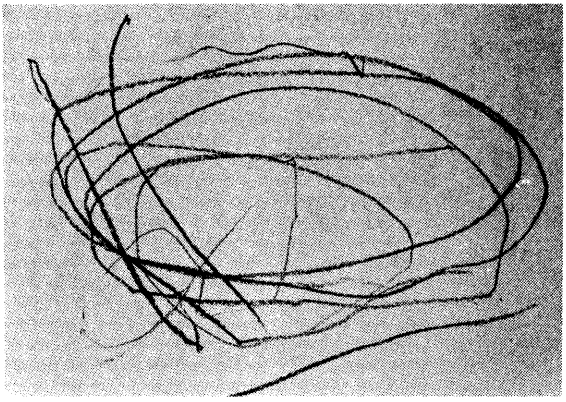
12枚目（茶）8枚目と同様



14枚目（茶）少しかいてすぐ紙をかえる



15枚目（茶）途中で描けなくなる紙をむいてあげると強い描線となる



16枚目（茶）のびのびしているが内容は単純になっている

筆圧が強くなる。描きながら声を出すことが多くなる。九枚、十枚はほとんど声を出して描く。十枚目になるとウーッウーッと二段階に区別出来るような声を出す。最初のウーッはやや弱くゆっくりと長い。後のウーッは大きく力のこもった声である。この声と同様描線にも変化がでる。前半はゆったりとのびがあり、後半になるとスピードが加わってはねるようにするどく細くなって消えて行く。声と手の動きは全くシンクロナイズしている。いかにも楽しそうである。

十二枚目の時に男の子がそばにやって来て、絵をのぞく。Y子は手を休め、のけぞるようにして男の子から離れる。男の子が遠ざかって行くまで目で追う。

十四枚目から十六枚目まではすべて茶色で描いた。茶色は先があまり良く出ていないのに、すでに六、八、十二と三枚も使っている。十五枚目にどうにもかすれて描きにくくなる。クレヨンの先を目に近づけて見ていた。

「私の顔を見る、次にクレヨンの先端を一本の指で軽くチョンチョンとたたく、そして私の顔を見る。私がだまって手を差し出すと、手のひらにクレヨンをのせる。先端の紙をむいて渡す。すぐ描き続ける。」

十二、十三枚目あたりから、あきてきたとは思われないが一枚描きおわる時間が短かくなった。新しい紙に変えてもらうことに興味を示したのかもしれない。私が紙を渡す時には声を出して笑うようになった。十一枚目からは、彼女が自分で自由に紙がとりかえられるように、手のとどく所に新しい紙を十枚ばかり重ねておいた。描きおわった紙を私に手わたしするが、とうとう最後まで自分で勝手に新しい紙を取りはしなかった。でき上がった絵をわたしてしまい、手もちぶさたになっても私の顔をニコニコしながら見ているだけであった。私の手が新しい画用紙を持ち上げると、すぐ手をのばして取って行った。

十七枚目も一応受け取ったのだが、描き始めないうちにレコードの音楽が聞こえて来た。Y子はどうしようか迷っていた。足や靴をいじったりモジモジしていたが、スッと立ち上がって皆のいる方にあるいて行った。

この二十分間でY子はいままでと違った経験をしたのかもしれない。彼女にしてみればあまりよく知らないおじさんがずっとそばにいた訳である。それでも次々に紙をとりかえてくれたり、描きにくいクレヨンをなおしてくれたり……

どう考えてみても彼女が積極的に私に働きかけて来たとはいえないが、なにかしらお互いの心の通じ合う瞬間もあった。視線が合ってともにニコニコ笑ったり、ともかく私との関係は少

しずつよい方に向かっていたといえよう。私の顔を時々見ながら声をたてのびのびした線を引っぱっている彼女は楽しそうだった。少なくとも一人きりでポツンと絵を描いている時とは違った楽しさを味わってくれたのではなかろうか。

3

順序は逆になるが、この十六枚の絵を描いた二週間ほど前のことである。Y子たちは机に向かってねんど遊びをしていた。Y子の隣にはボランティアのS、向い側には男の子とボランティアのKの四人がすわっていた。他にも何人かがプレー・ルームの中にいたのだが、この四人が一かたまりになっていた。

「Y子はねんどのふたをあける。小さなひも状のねんどをつまみ出す。もう一つ出す。次に板の上に箱ごとさかさにして全部を一度に出そうとする。ねんどは箱の底についていて外に出ない。Sがねんどを出す。Y子、大きな塊はどけてしまう。五、六センチほどのひも状の一つも両手にはさんでコロコロとすり合せる。そのねんどを板の上におき左手だけで前後にころがす。」

「Sがおだんごを二つ作って重ね、〝だるまさん、だるまさん〟という。Y子に見せる。受け取ってばらばらにする。おだんごの一つをとって両手にはさみコロコロこすり合せる。」

「向い側のKが男の子のために、蛇を作って見せ、ひも状のねんどをドーナッツ状の輪にする、次にKがそのドーナッツの一つをとりあげ、穴からのぞく、そのようすをY子も見ており視線が合う。……〝見えた、見えた、Yチャンが見えた〟……歌うようにいう。隣のSは虫めがねのような形を作り、これを顔の前にもって行き……〝鏡よ、鏡よ、鏡さん、そっと会わせて下さいな、みんなに合わせて下さいな〟……誰にいうでもなくロンパールームのまねをする。Y子はひも状のねんどをドーナッツ形にしようとするが、U字形の両端が接したような形になる。それを自分の目のあたりにおしあて、両目をつぶる。」

（顔をクシャクシャに動かし口をゆがめたりして目をつぶる。大人たちのように片目だけをつぶろうとしているらしい）

「Sがおだんごを六つ作り、お皿も作って上にのせ、Y子に示し……〝おリンゴよ〟……Y子お皿ごと自分の前にひきよせ、一つをつまみ口に入れるまねをする。口をモグモグ動かす。お皿のはじをもってグルグル廻しながら、ながめる。リンゴを全部お皿から出し、また中に入れる。この動作をくりかえしながら、時々リンゴを食べるまねをする。Kが……〝Yチャンおいしい？〟と聞くと、ニコニコ笑ってうなずく、KがSに向かって……〝私にもおリンゴくださいな〟……とか、〝はい十円、

どうもありがとうございます〟……とかいいながら大人どうしでリンゴの受けわたしをしている。Y子は大人たちのようすを見ている。Sが大きなまるいねんどを作り……〝Yチャン、これスイカよ〟……Y子はきちんと両手を重ねてスイカを受取り、おじぎをする。Y子はリンゴの一つをたたいてお皿を作り、その上にスイカをのせる。」

話はもとにもどって、十六枚の絵を描いた日のことである。絵を描きおえてからだいぶたち、一人でふらふらしているY子のところへ、私はドーナッツとお皿にのせたおだんごをねんどで作って持って行った。するとY子はさっそくドーナッツの穴からのぞくまねをしていた。たまたま通りあわせたボランティアのKがY子に声をかけると、おだんごの一つを手にのせてKに渡そうとする。Kはすわりこんで受けとる。Kは床の上に正座しておじぎをしたり、おだんごのやりとりが始まった。さしずめ「お客さまごっこ」というところであろう。

Y子のねんど遊びは絵のなぐり描きに相当する段階である。感覚運動的で、手のひらでコロコロところがしたり、トントンたたいたり、どのような形を作ろうという明確な目的意識があるのではないが、ねんどをいじっているうちに結果的にひも状になったり、ゆがんだ球ができ上がったりする。この例でもY子のねんどいじりそのものには、あまり変化が見られない。しかし遊び方は変わった。この時はそばにいた二人の大人がねんどで遊んで見せた。大人たちは自分がすでに知っているねんど遊び、――つまり物の形に似せて作る、作ったもので遊ぶ、遊ぶために作る等――ねんどでどのように遊ぶのか、その一つの典型を示した。それもことあらたまって実演したのでもなく、前もって打合わせたり、計算づくの演出でもない。二人の若いお姉さんたちがその場のふんい気で何となく……こんなことになってしまったという感じである。別にY子に向かって一緒にリンゴを作りなさいともいわなかったし、Y子はお姉さんたちほどねんどいじりをしなかった、それにもかかわらずY子はいつしか、ねんどで何をしたらいいのかを自然と身につけていったといえよう。

4

ここにあげたY子の例は決して特殊なものではなく、多くの年少幼児に見られるありふれたものである。私は三つの場面をとりあつかったが、それぞれに別の意味がある。例として適切であったか否かは一応不問にして、この際、私の意図を少し説明しておく。

第一の筆で絵を描いている場面は描画にともなうY子の探索行動のすがたの一つとしてとりあげた。字が読めたり、数がかぞえられたりすることと同様に、描画も「みなもと」にさかのぼっていくと、感覚運動につきあたる。しゃぶる・かじる・目で追う・さわる・ひっぱる等々。このような行動がくりかえされ発展し、やや高度になるとクレヨンをおってみたり、手や机・床・衣服に色をぬったり、いろいろなことが試みられ確められている。そして時には注意深く見つめたり、ためらったり、時には自信をもって実行したりする。私は描画の第一歩として、このような発達段階を含めて考えているばかりでなく、大変重視しているので、よい例とは言えないがとりあげた。

第二と第三の例は一連のことがらを二つの場面にわけてとりあげた。私たちの社会は長い歴史の上に現在の文化を作り上げて来た。言語も音楽もまた美術も文化的な所産である。子どもたちはこうした社会の中で生活していかねばならない。それゆえ既存の社会に生活している人々、つまり親やその他の大人たちとふれあい、そこから多くのことを身につけてもらいたい。それには先ず子どもにとって最初に出合う他人――私たち保育にたずさわるもの――との心の関係がうまくいかなければならない。お互いの心がうちとけていく過程の例としてとりあげたのが第二番目のものである。もとより、何回もの積み重ねがあってこそ、心が通じあうようになることは当然である。第三の例は顔見知りのお姉さんたちとのねんど遊びの場面であるが、Y子が大人との共通の広場に向かって自分から入っていく過程とみなして取りあげてみた。

幼児の絵を主題としながら、内容がやや唐突と思われるかもしれないが、絵画・製作といわれようが、情操教育とか治療教育と呼ばれようが、私はお互いを尊重し心のふれあいを出発点としたいと考えている。それよりむしろ描画を媒介としてわだかまりのない人間関係に高めようとしているといった方がいいかもしれない。

なお、ある児童相談所での三歳五ヵ月の時のY子の判定は、ダウン症候群・知能検査側定不能・中度精神薄弱等々記載されていた。全くそのとおりであろう。しかし彼女は遅くてもマイペースでコツコツと自分の道を進みつづけている。そしてすべての子どもがあゆんで行く道と異なったものでないことを附記しておく。

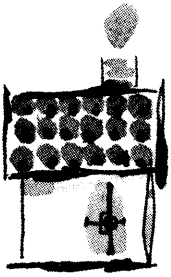
（つづく）

読書のすすめ

「死海のほとり」

遠藤周作著

横張和子



遠藤周作氏の作品はこれまでも読んだことがなかった。「沈黙」が評判作であったらしいが読まずじまいであった。これはその作品の姉妹篇であるということだ。

同じくキリスト教に題材を求めている。遠藤氏が格闘して求めているイエス像だが、氏がイスラエルの現地の風土の中にたずね、イエスの生涯にまつわった何人かの人々の群像の中に描き出そうとしている。そのイエス像はこれまでの教会の、また聖書のイエスとはかなりちがったものである。奇蹟を行ない得たイエスではない。氏のイエスはまことに要領の悪い、みじめに失敗をくり返す非力な男であり、取柄はただ優しいということであり、奇蹟のようなはれがましいことは何一つできなかったけれども、病む人、悩む人のそばにいて、慰め、誠実を尽す人であった。彼を迎える人々は、初めは救い主として期待し、ついてくるが、やがて何もできない無能な人とわかって、失望して見すて去って行く。

失意のイエスは策略にうまうまと乗せられ、死刑の宣告を受ける。群像の「知事」「蓬荒りの男」「百卒長」の段はイエスの十字架の道行を書いているが、徹頭徹尾とらわれたイエスのみじめさが描かれている。重い十字架を肉のおちたやせた身体にかつがせられ、血を流し、何度もころびながら、汚物を投げられ、狭い坂道をむち打たれて、刑場にせき立てられる。神の愛を説いてまわった男がなぜこのようなひどい目にあうのか、処刑に当たるローマ人には

その理由がわからない。

あえぐような苦しみの中でイエスが神にこうているのは、自らの苦痛の軽減でもなく、救いでもない、この苦しみによって他の人々の苦しみ、生と死のあらゆる苦しみがこれによって除かれるように、そのために、最もみじめで、最も苦しい死が与えられるようにということであった。神はその願いをきき入れて、最もつらく残酷な死への長い道のりを与えている。絶命への長い時間、十字架上のイエスは突如、「神よ、なぜ私を見すてられましたか」と悲痛な叫び声を発し、そして「すべてはみ心のままに」と息絶える。

この本はまことに弱い、この世的には落伍して、果てには死を招くほどに要領の悪い男としてのイエスが描かれている。愛は実ることの少ない、多くは裏切りで終わるものであった。ただここには誠実と親しみと神への従順があった。

この本を読んでいるとわれわれの日常の祈りが何であったかと思う。神とのつながりにおいて慎んで生活していると思うことさえ、重荷で不信に満ちたものであった。祈りはむなしく、不信を強めるばかりであった。しかしこの本を読んでいくうちに、神のみ心は全くわれわれの願望の次元を超えているものでないかと思われてくる。具体的な願望はどれもむなしく、目先のことにとらわれた利己的なものに思えてくる。神がわれわれにつかわされたというイエスは、このような生涯をとげた。それは遠藤氏のイエスで印象的である。イエスはわれわれにとって何であろう。この本の中からの一節をとれば

「イエスに人生のある時、横切られたものはイエスを忘れることができない、それはイエスが愛することをやめないからだ」

「私は何度も棄てようとした、しかし私をあなたは見棄てない」

愛の非力、そしてまたこの強靭な強さ、キリスト教の愛とか祈りとかについて、考えさせる本であった。

（元　お茶の水女子大学）

行事によせて

―人間の生活と祭り―

本田和子

秋は、行事の多い季節である。

青い空に紅白の玉がとびかう。玉入れのかごはとても高くて、空にとどきそうだ。だから、力いっぱい投げ上げても、なかなか、かごには入らない。でも、最後に一つ、「ピーッ」と笛が鳴った瞬間に投げ上げた赤い玉が、ぬけるように青い秋の空を背景にして、吸い込まれるようにかごの中に入っていった。

はじめての運動会の、美しい思い出である。

◆　◆　◆

現在の幼稚園で、行事はしばしば保育の癌とされている。行事が近づくと、保育者も子どもも準備に忙殺される。保育者は子どものことを考えるゆとりを失い、子どもは自分の遊びをたっぷり遊ぶ時間を失う。

「行事さえなかったら」という若い保育者の嘆きの声が聞こえてくる季節である。

幼稚園の行事が、現状ではさまざまな問題をはらんでいることは確かである。保育者にとっても子どもにとっても、「あわただしく、苦しい」スケジュールである。

それならば、行事を全廃してしまってはどうだろうか。毎日の生活の充実だけをひたすら心掛けて、「運動会」も「遠足」も、「お餅つき」も、みんな幼稚園から追放してみては？

しかし、この提案に対しては、多くの保育者が首をかしげる。「でも、やはり……」

行事には、完全に追放しきれない「何か」があるようだ。

◆　◆　◆

私どもの先祖たちは、生活の要所要所に行事をおいて、時間に区切り

をつけ、生き方にリズムをつけてきた。豊作を祈念して春は田の神を祭り、先祖の霊を招いて夏は迎え火をたいた。秋には、収穫を祝って鎮守の森にたいこが鳴りひびき、新しい年を迎えるために、人々は冬の住居をきよめた。

農作業の区切りごとに神祭りが行なわれ、人々は、その日は労働から解放されて、思いっきり祭りを楽しんだ。祭りは、きびしい労働の日々の中に挿入された「ハレの日（特別な日）」だったのである。

人々は、日常の汗にまみれた労働の過程をつき破り、平常は味わえないものを口にし、毎日の生活とは異なる特別の行動をする。しかも、部落の全員で、特別の日をすごすのである。

ロジェ・カイヨワは次のように言う。「祭りにおいては、祭りと祭りの間の長い合間に蓄積した財貨が蕩尽され、ルールの欠除がルールとなり、あらゆる規範が仮面の存在の伝播によって覆えされる。こうしたすべてのことから、共に眩暈を感じることが、集団生活の絶頂となり、紐帯となる。」

人々は、一場に会して神酒を汲み、みこしをもんだ。火を囲んで舞ったり、拍手して熱狂したりした。鎮守の社は、共同体のシンボルである。一つの神の氏子であることで、人々は分散孤立して行なわれる農作業の孤独から解放され、祭りにおいて共同性を確かめ合った。

祭りの場で、個々人を縛っていた日常的な約束や秩序は影を潜める。あらゆるタブーが力を失って、「聖と俗」の境界すらとり去られ、人々は、神とすら交流し得る時をもつ。人々は、祭りの庭で、「存在の多義的可能性」を生きることができた。

◆　◆　◆

現代の私どもは、現実的・常識的な束縛にみちみちた日常性のきずなに、がんじがらめにされて、身動きできない。子どもの遊びですら、あまりにも現実的・常識的であって、想像と創造に乏しいのである。

「よく遊んでいるのだが、何かしら迫力がない。ムンムンするような熱気が感じられず、何ともいえず物足りない」と、最近の子どもの遊びを評するベテラン保育者の言は、傾聴に価するものであろう。

子どもたちは、遊びの世界で狂気

乱舞することなく、日常性から脱却できないままに、常識的な行動の規準や価値を、そのまま遊びの世界にもち込んでいるようだ。子どもの遊びにおいて実現されるべき「存在の多義的可能性を生きる」という特権を、子ども自らも放棄してしまい、また大人自らも、気付かずしてそれを奪ってしまっているように思われる。

このような日常性を打ち破る手段として、行事を考えてみてはどうだろうか。

幼稚園の行事を、「ハレの日」として位置づけるのである。

楽しみに期待して「待ち」、「いつもと全くちがった一日を、思いっきり楽しむ」それだけでよいのではないか。

行事を経験することによって、「何がねらえるか」、あるいは、「どんな教育効果があがるか」などと、いわゆる「教育的」なことがらを近視眼的に考えることをやめて、保育者にも子どもにも「徹底して楽しい一日」とするのである。

祭りの準備に忙しいのは大人である。子どもたちは、あわただしい母親の動きや、かすかに聞こえてくる祭り囃子の練習を耳にしながら、ただ、胸をときめかせて「待った」そして、訪れた祭りの一日を、「興奮し、熱狂して」すごした。

「胸のときめき」と「みんなで熱狂する時間」を、いかにして作り出すかだけが、保育者の課題とはいえないだろうか。

幼児の教育 第七十二巻第十一号

十一月号　定価一二〇円

昭和四十八年十月二十五日印刷
昭和四十八年十一月一日発行

112東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津守　真

112東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一
印刷所　凸版印刷株式会社

101東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　**フレーベル館**
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

園生活の思い出を…… キンダーノコール絵皿

☆想い出がのこります

絵皿（皿たてつき）

1枚　　400円

ほかに用紙

（50枚1組）100円

フレーベル館

☆かんたんに作れる楽しい絵皿

園児が好きなように描いた原画がそのままプラスチックのきれいな絵皿としてのこります。焼きものとはちがい、焼いたり、薬をかけたりする手間はまったくありません。キンダーノコール絵皿の特殊な加工は、割れたり変質したりせず、退色を防いで、園生活の楽しい1コマをいつまでもカラフルにとどめ、**卒園の記念には、最適です。**なお、描画用具としては、水彩絵具、インキ、クレヨン、色鉛筆、サインペンなどかわきの早いものならなんでもご使用になれます。

☆申込方法

もよりのフレーベル館代理店・支社・支店・営業所にお申込みください。折り返し、絵皿用の特殊用紙をお届けいたします。お描きくださった原画を圧着加工して絵皿に仕上げ、個人別包装にして園にお届けいたします。絵皿たてもサービスいたします。

キンダー ぬいぐるみフレッシュ

見ているだけでも、楽しくなる、新しい感覚の「ぬいぐるみ」です。

ファミリーシリーズ…… 3体1セット　9,500円

いもむしさん一家　大（おとうさん）4,000円
中（おかあさん）3,000円　小（こども）2,500円

スイートシリーズ…… 5体1セット 11,500円

Ⓐニコニコ…… 2,000円　Ⓓプンプン…… 2,500円
Ⓑオーオー…… 2,000円　Ⓔエンエン…… 2,500円
Ⓒスヤスヤ…… 2,500円

海のシリーズ…… 4体1セット　15,500円

①カ　メ…… 5,000円　③カレイ…… 3,500円
②イ　カ…… 3,500円　④マンボウ… 3,500円

●分売もいたします

色・柄は、流行により多少の変更があります。
よごれた場合には、ドライクリーニングご利用ください。
生地：アクリル100％（スィートシリーズⒹⒺのみ綿100％）
つめ込み物：パンヤ

フレーベル館